

# 地域交流センター通信 22

November 2012, Volume 22

特集1

子ども・学校が地域交流を支え促す

特集2

地域・故郷を思う  
— 東日本大震災と私たち — (その3)

都留文科大学地域交流研究センターとは？

地域交流研究センターでは、地域に根ざし地域と共同した活動を推進し、つぎのような取り組みをおこないます。

- 1) 地域交流に関するプロジェクトの推進
- 2) 学校の先生方などの教育相談
- 3) 地域のニーズに応えた貢献活動
- 4) さまざまな地域交流の連携の推進



巻頭文…「自然との共生」って、簡単に言うけど、大変なことだと思う

—たとえば、富士山との共生— ……上杉陽… 4

### 特集1…子ども・学校が地域交流を支え促す

「反省的实践家」としての教師をめざす

学生アシスタント・ティーチャー（SAT）活動の展望… 佐藤隆… 6

子ども教室に参加して… ……北山祥子… 8

地域指導員と子どもの関わりをみて… ……渡邊和子… 8

「子どもは地域の宝」～農業体験を通して… ……長田元子… 9

子どもと触れ合うことの楽しさ… ……村山華子… 9

よみ聞かせから読書の楽しさを

—新しいよみ聞かせの形 iPad、大型絵本、そして地域の昔話— ……日向良和… 10

小学生と楽しもう！

「Hello！英語でワクワク2012」……奥脇奈津美… 12

アートの種まきワークショップ「アート巣箱をつくろう」を振り返って… ……舘山拓人… 14

学級づくりの向上をめざす実践講座… ……鶴田清司… 16

平成24年度都留文科大現職教員教育講座

今年もまた来ました… ……曾根完樹… 18

進み続ける教師でありたい… ……岡田直也… 19

子どもたちと「ムリネモ」\*の森をつくる

—都留文科大附属小学校での実践から— ……北垣憲仁… 20

野生動物の出会いから環境教育… ……中込雄一… 21

都留文科大附属小学校4学年うらやま観察について… ……原田裕太… 21

都留市環境教育副読本に寄せる… ……志村達男… 24

都留は自然の博物館	長田元子・渡邊和子	25
都留市旭小学校親子環境学習会に寄せて	三枝泰子	26
山梨県北杜高校・講演会		
「ムリネモの森にようこそ」	土屋浩之	27
二年目を迎えた都留文科大学・環境教育ESDプログラム	坂田有紀子	28
<b>特集2・地域・故郷を思う―東日本大震災と私たち―(その3)</b>		
人と土地が「生活」をつくっている ―原発20km圏に生まれて―	佐藤久美子	30
原発がもたらしたものは何だったのか ―佐藤彰彦さんの講演を聞いて	川波寿樹	32
被災地の再生は、地域住民の自立から	渡辺豊博	33
大槌町吉里吉里での里山再生に学ぶ	藤原優紀	34
防災マップ作りから見えてきたこと	梅崎靖志	35
<b>トピックス</b>		
COLLAGE <sup>コラーージュ</sup>	山名花苗	36
「熟議」について	北山雅也	36
学生グループ「創志相愛」がつなぐ地元商店街と文大生	原大貴	37
文大農ネット企画「朝市@文大」オープンキャンパス編の実施を終えて	崎田史浩	38
企画展「都留、地名の旅―郷土の記憶をめぐる―」を開催して	森屋雅幸	39
分かち合う楽しさを知る観察会	鈴木陽花	40
「いじめ」問題を考える視点を学ぶ	杉本賢二	41
地域探訪を楽しむ「富士道歩き」	内藤恭義	42
富士道の「先達」に学ぶ	牛丸景太	43



# 「自然との共生」って、簡単に言うけど、大変なことだと思おう

—たとえば、富士山との共生—

上杉 陽

## 1 東北地方太平洋沖地震と富士山三合目の地震

昨年2011年3月11日に東北地方太平洋沖地震が発生し、未だに、各地で余震や誘発地震が発生し続けています。誘発地震の中で、都留文科大学に関係が深いのが、東北地方太平洋沖地震の4日後の15日に富士山南西側三合目地下14キロで発生したマグニチュード6.4の直下型地震（静岡県東部地震）です。

もともと都留市を含む山梨県東部と神奈川県西部一帯は断層も多く、地震も多いところです。マグニチュード5.6の地震が1976年→1983年→1988年→1996年と5〜10年置きに「順調」に起こっていました。ところが、その後、このタイプの地震が起こらなくなり、地下深部でなにか異変が起こっているのではないかと心配されてきました。15年の間隔が空き、東北地方太平洋沖地震に誘発されて、富士山南西側三合目でワンランク上の大きな地震が「どかん」と起こりました。この地震で富士山は概略南北方向に圧縮され東西方向に引き延ばされました。引き延ばし量は概略10cm程度と考えられる、という気象庁の暫定観測結果が、当時はネットで検索できました。もしも、1mも引き延ばされていたら、富士山の地下からマグマが湧き出していたかもしれません。富士山が崩れていたかもしれません。皆さんは、富士山噴火を歓迎しますか？二度と噴火してほしくないですか？

## 2 富士山は10万年かけて創り上げた日本一の美しい山・古くからの霊山

富士山は、プレートテクトニクス上は、ほとんど例がない特異な位置に誕生した極めて特異な火山です。10万年間、何百回もほぼ同じ火口から噴火し続けて、時には山が壊れてしまうこともありましたが、概略2200年前に、遂に現在の山頂火口を中心とする日本ではとびぬけて高い概略切頭円錐形型の「八面玲瓏」な巨大な山体を持つ秀峰（孤立峰）を造り上げました。海際に誕生したこと、東側に日本一広大な関東平野があったことから、富士山は日本一の可視域を持つ特別な山となり、広く、人々に崇拜されています。三重県・奈良県・福島県・新潟県などからも見えます。

黒潮に乗って渡来し続けた原日本人にとって、富士山は重要な灯台の役割を果たしました。八丈島あたりまで来ると、陸地が見える前に、雲上に雪で純白に光り輝く富士山頂上部が見えてきます。ですから、黒潮渡来人には富士山は天空に浮かぶ神の住まう霊山に見えたのです。東京都町田市忠生遺跡には山梨県から相模平野に出てきた縄文人が持ち込んだ富士山の溶岩の皮や小さな発泡した溶岩球などが、大切に保管されておりました。都留市民病院付近にあった同じく縄文時代の牛石遺跡では、直径50cmの環状積石遺構があります。太古の昔から現代に到るまで、多く

の文化遺産が積み重なっています。富士山ほど多くの文献が残る山はありません。ほとんど底なしと言って良いほど富士山に関する文献があらゆる分野で見つかります。山梨県教育委員会から、富士山に関する多数の文献を収録した報告書が出ています。本学図書館にも寄贈収録されていますので、一度ご覧下さい。山梨・静岡両県は富士山の文化遺産登録の努力を続け、2012年1月には、日本政府が正式に登録申請し、現在は、国際記念物遺跡会議（略称ICOMOSイコモス）が審査中です。来年5月には勧告が出る方向です。

## 3 富士山の地下には膨大なマグマを産む特別な仕掛けがある。富士山は若くて不老長寿。

富士山は駿河湾近くの低平な大平原にマグマが噴出して、10万年かけて積み上げた第1級の体積を持つ大火山です。その容姿は遠方から見ると女性的で、かっこ良いだけではなくて、日本の山の中ではとびぬけて背が高いのです。日本の高山第2位と第10位の高度差が129mにすぎないのに、第2位北岳と第1位富士山との高度差は、なんと584mもあります。何故、これほどまでに高くなったのでしょうか？

並みの火山では、そもそも10万年間もマグマを供給し続ける仕掛けを作れません。もし、供給できたとしても、普

通は、先に噴き出したマグマが固化した溶岩や火山礫、火山灰が邪魔になって、同じ位置からは噴き出しにくくなり、噴き出し口が移ってしまうものです。ですから、火山列や火山群はできて、たった一つの中心火口を持つ高い孤立峰火山は造りにくいのです。

ところが富士山では10万年間たつぷりと若々しいマグマ（鉄やマグネシウムに富んだ流動性の高いマグマ）を同じ位置で供給され続け、ほとんど同じ噴き出し口位置から噴火し続けて、海際の低い土地から噴火し始めたのに、遂に日本一のとびぬけて高い山となったのです。

#### 4 富士山は「赤い頑丈な鎧兜」に覆われ、雨水や暴風、凍結破砕に耐え抜いている。

見事な広い裾野と上に行けばいくほど急斜面となる指数曲線型の山体が弥生時代初期（2200年前頃）の大噴火で完成しました。この大噴火時に富士山の5合目以上（概略2500m前後以上）に厚く降り積もった高温の火山弾などはお互いの熱で蒸れて溶けてしまい、特に7合目以上では、溶結火砕石という力チ力チの固い岩体となりました。降り積もったものの表面は、高温で酸化しましたので赤鉄鉱ができて赤褐色です。富士山5合目以上に朝日や夕日が当たると赤紫色〜赤褐色〜ピンク色に輝くのはこのためもあるのです。葛飾北斎の赤富士は有名ですが、あれはフィクション幻想ではなく、本当に「赤富士」に見えることがあるのです。富士山山頂部一帯は並みの火山とは異なり、頑丈な赤い鎧兜をかぶっている特別な山なのです。

富士山山頂部一帯は1年のうち8か月程度は平均気温が0℃以下で、シベリア並みの永久凍土となり、凍結破砕により地表部はぼろぼろとなります。降水量は年平均3000ミリ前後で、激しく地面を洗掘します。また、風も強く、最大風速が10m秒を超える日数が年間で300日を超える

ことも珍しくないのです。こういう状態ですから、富士山山頂の火口を取り巻く円形の山頂平坦部は、本来ならば、あちこちが削り落とされ、遠方から見ると、ぎざぎざの鋸歯状になっていたはずですが、山頂を取り巻く八百八沢も、現在よりも深く山体を削り込み、遠方から見た富士山は、しわだらけの老いた山に見えたはずですが、そうならなかったのは、赤い鎧兜のおかげです。大噴火の賜物、溶結火砕岩の置き土産なのです。富士山が老紳の住まいではなく、若くて美しい女神の住まいとされたのは、この弥生時代初期の大噴火の賜物です。

#### 5 大地獄が日本一の霊山を維持している。

以上見てきたように、古来、日本の象徴とされ、今日では年間3000〜4000万人が訪れる、そして年間20〜40万人が頂上まで登山するという大観光地「富士山」を造り上げ、維持してきたのは、東海大地震〜山梨県東部地震〜関東大地震（首都圏直下型地震）と密接に関わる富士山地下深部の「大マグマ製造工場」です。これからも、ここでマグマを製造し噴火し、雨水の浸食で削られた部分を補修しなければ、富士山は、がさがさでしわだらけの見るも無残な痩せ山となってしまうことでしょう。

皆さんは、富士山が今後も噴火し続けることを歓迎しますか？それとも、二度と噴火してほしくないですか？

#### 6 自然との共生とは、どういう意味なんだろう？

今回は富士山を例に挙げましたが、とにかく、共生しようとする相手の生い立ちや諸特徴を知らなければ、共生はできません。「見たくないものは見えない」という政府の東京電力福島第一原子力発電所事故調査・検証委員会畑村委員長の名文句は、富士山についても当てはまります。口

マンチックな富士山観のままでは、本当の共生はできません。想定被害を最小限に見せかけ、何か起こったら、「想定外」にしてしまうというのは、もはや時代遅れです。以下に、富士山、あるいは桂川の生い立ちにかかわる文献を年代順に挙げておきます。

（つえすぎ よう・本学名誉教授）

#### 引用・参考文献(年代順)

- 1) 都留市史編纂委員会編（1986）『都留市史』資料編：地史・考古Ⅰ、537頁、都留市発行。
- 2) 上杉 陽（1992）『桂川水系の成立過程』都留市郷土研究会編「論集郡内研究」、358頁、1〜20頁。  
：富士山誕生のはるか前からの都留市一帯の生い立ちが書かれています。
- 3) 上杉 陽（2000）『富士吉田市および周辺地域の古地理の変遷』富士吉田市史 通史編第1巻原始考古中世、694頁、5〜65頁、富士吉田市発行。  
：主として富士山の生い立ちについて書かれています。
- 4) 中井 均（2003）『地質』西桂町誌 本編「自然とあゆみ」、686頁、73〜134頁、西桂町発行。  
：地球誕生当時から順に今日までの地史が描かれています。
- 5) 上杉 陽編著（2003）『地学見学案内書「富士山」』日本地質学会関東支部、117頁。  
：地学ゼミ生の卒業成果等が掲載されています。
- 6) 山梨県環境科学研究所・日本火山学会編（2007）『富士火山山梨県環境科学研究所発行』。  
：内閣府富士山ハザードマップ作成協議会系の研究者の最新の研究成果が掲載されています。
- 7) 中井 均・上杉 陽（2011）『町田市忠生遺跡A地区150号土孔第6層の「不明発泡体」と包含層の特徴およびに層位について』東京都町田市忠生遺跡A地区Ⅲ―A1地点 旧石器・縄文時代遺物編（2）1、1〜12、忠生遺跡調査会。
- 8) 山梨県教育委員会（2012）『山梨県富士山総合学術調査研究報告書「富士山」』。

# 特集1：子ども・学校が地域交流を支え促す

都留文科大学の「文科」はhumanitiesヒューマニティーズ（人文学）を意味していますが、大田堯元学長はこれを「人間研究」と訳し、都留文科大学を広く深く人間研究を目指す大学として理解しています。本特集は、この人間研究の大事な一環として、学校の学びへの関わり、地域の子どもたちとの関わりの諸実践に光をあてようとしています。

子どもたちの生活と成長を見守り、あるいは学校の教育実践に協力する営みには、私たち大学人の研究と教育を深く見つめ直させるものがあります。新しい世代の成長に関わるということには、過去を振り返り、未来を見通しつつ、人間の肉体的な成長ということを軸に生活・社会・文化を再吟味させる創造的な契機が含まれているからでしょう。

特集は、S A Tの事業、継続されている「子ども教室」、英語や美術からの文化活動、地域の教員たちを中心とする学習交流のシリーズ、歴史をもつ現職教員教育講座、付属小学校での総合学習の実践、都留市環境教育副読本の作成、都留フィールド・ミュージアムの蓄積を生かした学校協力の諸実践、二年目を迎えた本学独自のESDプログラム、という構成をとりました。

## 「反省的実践家」としての教師をめざす 学生アシスタント・ティチャー(S A T)活動の展望

佐藤 隆

### 1・S A T活動の目的を再確認する

いまではS A Tといえば説明もいらない言葉になったように感じますが、その概要を簡単に述べると次のように言えます。これは都留市教育委員会の協力の下、市内小中学校に対して学生アシスタント・ティチャー(S A T)を派遣し、放課後の学習支援(Aタイプ)と、授業時間中に教師と共にT・T<sup>1)</sup>のひとりとして活動する(Bタイプ)、「不登校傾向」「障害」等による

を設けて、都留市教育委員会・大学・小中学校の三者が協力して行なっており、このような学校間連携・ネットワークの構築も地域を基盤とする新たな教師養成教育の試みでもあります。今回の報告は、都留の教育現場にす

困難をもつ子どもへの個別的な支援を行なう(Cタイプ)に分けられます。活動の領域と内容にそれぞれがいはありますが、いずれも重層的な「子ども体験」を学生がくぐって、それを「言語化」することを通じて「反省的な実践家」としての教師の姿勢を身につけていくことを目的としています。

また、運営にあたっては運営協議会

### 2・活動の内容

昨年(2011年)度は市内ほぼすべての学校においてA・B両タイプの活動を行いました。そのようすを東桂小学校の子どもたちや保護者の感想で確認してみます。

子どもたちの感想から

・先生が優しくしてくれて、よかった。

分かりやすく教えてくれた。  
 ・授業の時できなかった問題もS A Tで勉強したら分かるようになった。  
 ・先生が早く名前を覚えてくれてよかった。

保護者の感想から

・学校で先生以外のお兄さんやお姉さんに勉強を教えてもらうことは、子どもにとっては楽しく素直に受け入れられたように思う。  
 ・毎回来しように受けていました。本人に聞くと分かりやすく「楽しい」と言っていました。  
 ・少人数での学習はとってもありがたいです。また、来期もお願いしたいです。

このように、教師以外のおとな（それも比較的年齢の近い）とともに活動し、学ぶことは子どもにとって新鮮であり、授業とは異なる学び方を経験できたことが、報告されています。

一方、学生にとっては、教育実習とは異なる角度から、子どものようすを学び、授業づくりの難しさを知る良い機会となっています。また、S A T担当の教師たちが、メンター<sup>2)</sup>的な役割を果たしてくれており、学生たちが教師のしごとの難しさや忙しさとともに「やりがい」を見出し、いく姿が見られました。

学生の感想から

・最初は子どもたちの実態を把握できずにどういう教え方をしたらよいか困ったときも何度かありました。そのなかで先生方との情報交換は貴重な時間でした。  
 ・使用教材はいろいろあって良かったと思います。その教材を参考に自分でオリジナルの問題を作ることができました。  
 ・学校の生の日常と向き合えたことは、とても勉強になりました。

こうした学生たちの姿に対して、「現場」からは「いろいろなレベルの子どもたちがいる中で、よく頑張っていた。意欲が持てるように工夫していることも良かった。終わってから子どものがんばりを認めるお手紙を書いてくれて、子どもたちは喜んでいた」という声や「子どもたちをどう指導すればいいか真剣に考え、指導していた」等のように、好意的な評価が得られています。

### 3・展望と課題

もちろん、課題がないわけではありませんが。今日の現場の忙しさのなかで、打ち合わせの時間が十分とれないという声は、学生、教師の双方から毎回出されており、この問題をどのように乗り越えていくかは、都留市だけでなく、

日本の教育を今後どのように展望していくのかにかかわって重要な問題です。子どもにとって自由と安心の空間を作り出していくことは、この問題と直結しているからです。

また、もうひとつの問題は、週に1度しかないS A T活動のなかで、「子どものことがどこまでわかるのか」「自分がどこまでかわかってよいか」という学生の悩みもあります。こうした悩みは当然のことであり、学生である今ここで「解決」しなければならぬ問題でもありません。そのことを補い、自分なりの教師像を思い描いているのが大学で行なわれる「学校参加」の授業です。この授業は、おおよそ1月に1回行なわれるのですが、学校ごとに、ともに活動している学生同士がグループ討論を行ないながら、学校での活動のふりかえりが行なわれ、実態を具体的に学生が話し、それについて学生自身が考えるという機会になっています。それはまた、子どもとの関係性の中で生じる学生（援助者）自身の感情を見つめ、自分のありようを問い、また、それらをもとに参加している学生たちと共有するカンファレンスの場でもあります。

来年度以降は、現在の「学校参加」に加えて、4年次に必修化された「教職実践演習」も授業名として加わります。担当する教員も、初等教育学科の

教職科目担当者だけでなく、国文、英文、社会科学科の教員や教科専門の教員も参加し、厚みのある、また多角的な「指導」体制が組まれることになっていきます。

じつは、世界の教師教育の動向も全体としてみれば、「いじめ問題」や「不登校問題」などへの対応の必要もあって「専門知識の教授・伝達」から、「教育と子どもの事実」を基盤にした新たな教育学とそれを中軸に据えた教師教育がめざされてきています。これは私たちが都留の地で追究してきた「子ども理解」を教育実践の基盤とする発想が、世界の教師教育のレベルでプログラム化されつつあるのだということもできます。

こうした動向にも目を向けながら、今後も「実践と理論の往還」を軸に据えたS A T活動充実をはかっていきたいものです。

(さとう たかし・本学初等教育学科教員)

注

- 1) チーム・ティーチング
- 2) よい指導・助言者

# 都留市「放課後子ども教室」事業を紹介します。

杉本光司

本事業は、文部科学省の「子どもの居場所づくり事業」（平成16年度）および「地域教育力再生プラン」（平成17・18年度）を発展的に引き継ぎ、都留市子ども協育連絡協議会を推進主体として、都留市教育委員会学びのまちづくり課生涯学習担当が事務局を担って実施している事業です。市内四つの小学校区（東桂、谷村第二、宝、旭）を拠点として、『学校の体育館やグラウンド、図書室等に安全・安心に活動できる拠点を設け、地域の住民、大学生、社会教育関係者などを活動指導員として配置し、小中学生を対象とした放課後や週末などにおける遊び、スポーツ、体験活動、学習支援などの様々な活動を行う』ものです。本学の学生には学生指導員としての協力・活動が期待されており、地域交流研究センター長は「都留市子ども協育連絡協議会委員」として参加しています。平成19年度より、市町村が費用の3分の1を負担することとなり、県下の多くの類似事業が廃止となるなかで、都留市がいはやく事業の継続と費用負担を決定したことは特筆に値し、平成21年度からは、学童保育事業との連携も開始されたことにより、市内全地区への拡大を希望する声も多いようです。

教職志望者の多い本学にとっては、三年次から始まる教育実習やS A T（学生アシスタント・ティーチャー）とは、ひと味違った、気軽に日常的に子どもたちと触れ合うことができる二年次向きの活動として定着しています。

（すぎもと てるじ・本学地域交流研究センター長）

## 子ども教室に参加して

北山祥子

私が子ども教室に応募しようと思った理由、それは、普段同じ年代の人としか関わる機会がないからです。だから、子ども教室のお知らせを見た時、すぐに応募することに決めました。子どもたちはもちろんのこと、地域の大人の方たちとも交流できることは、私にとつたいへん魅力的なことでした。

活動での子どもたちの様子は元氣そのものでした。読書・学習の活動では、みんな時にはお喋りを交えながらも、一生懸命宿題に取り組んでいました。宿題が終わると、私に遊びのことなどをずつとお話してくれて、とても可愛く感じました。

最初は子どもたちとのコミュニケーションの取り方に不安を感じていましたが、子どもたちの方から私にどんな話しかけてくれて、すぐに不安な気持ちはなくなりました。活動の時間が終わり、子どもたちが帰る時間になると、「また会いたいな」と言ってくれる子どももいて、本当にこの活動に参加して良かった、と思いました。またこのような機会があれば、ぜひ参加したいです。

（またやましようこ・比較文化学科3年）

## 地域指導員と子どもの関わりをみて

渡邊和子

都留市放課後子ども教室は、現在、4地域において開設しています。指導員は各地域の方々にお願いしており、年間を通して、遊び・ものづくり・自然体験など、指導員の特技を活かした活動や、地域行事への参加も取り入れ、さまざまな体験活動を企画しています。

登録した子どもたちは、その中から自主的に選んで活動に参加します。活動では、みんなが楽しく活動ができるよう、ルールも確認します。活動中の子どもはとてもものびのびとしており、指導員の方々はそんな子たちを見守りながら、それぞれの良い面をほめてくださいます。また、子どもが家庭に戻って、活動の様子を家族に嬉しそうに話す様子、教わった料理や遊びを家族と一緒にする様子もうかがうことができ、子どもの興味を広げることや自信にもつながっているようです。

街中でも指導員の方とすれ違っていると、子どもたちがニコニコとあいさつをします。指導員の方にとつても子どもたちの笑顔やパワーをもらえることから、いきがいの一つとなっていると思います。



さまざまな体験活動を通して、子どもにとって地域全体が安心していられる居場所となるように、さらに放課後子ども教室の輪を広げていきたいと思っています。

(わたなべ かずこ・放課後子どもプランコーディネーター)

## 「子どもは地域の宝」 農業体験を通して

長田元子

「わあー！こんなに大きなスイカがおじさんの畑で取れたのー」「甘くておいしい！」「家はどこだ」「おー○○の孫か」。スイカをほおぼりながら、指導員のおじさん・おばさんと会話がはずみます。まさに「地域の子」です。

この日の農業体験の活動は、「被災地に送る花の収穫」です。5月から、代表指導員の方が種から育ててくださった約800本のエゾキクの苗を、皆で植えて育ててきました。

剪定はさみで一株一株切り、水を入れた大きなバケツの中で「水切り」をしました。みんな初めての経験です。次に、花の茎をそろえて、計50本をやさしく丁寧に箱に詰めていきました。「復興に向けて頑張っている被災地の

人が、きれいな花で少しでも元気になってほしいから丁寧に収穫しました」。この、新聞のインタビュウを受けた5年生のKさんの言葉からも、今回の活動を通して少しでも力になったことに喜びを感じたと思います。

ひとつの体験活動を通して地域の方々とふれあい、顔見知りになり、この出会いが深まることで「絆」になると思います。子どもたちを取り巻く学校・家庭・地域の連携や協力の輪が、さらに大きく広がっていくことを願っています。

(おさだ ともこ・放課後子どもプランコーディネーター)

## 子どもと触れ合う ことの楽しさ

村山華子

子ども教室があると知ったのは、授業の際に配られたプリントからです。それを見て子ども教室をやってみたくてすぐに思いました。それはどうしてかというところ、教育実習に行くにあたり、できるだけ子どもと触れ合う機会を多く持っておきたい、そして子どもたちとの接し方や子どもの状況などを把握したい、そして純粋に子どもと一緒に

楽しく活動をしたいという気持ちがあったからです。

初めての日はとても緊張しました。全く知らない子どもたちにあつてどのように接したらいいのか分からなかったのですが、不安が大きかったと思います。

しかし、子ども教室を体験してみると、子どもたちは素直でいい子たちばかりで、私のそばによって一緒に活動をしてくれる子どもたちがたくさんいました。子どもたちは楽しく活動をし、積極的に活動に参加していました。何回も経験させてもらったので、さまざまな内容の活動をやりましたが、どの活動もすごく積極的に参加して私と一緒にやるという気持ちを表してくれました。

子ども教室へ参加したことで、子どもとどのように接していけばいいのか、子どもとのふれあい方を少しは学べたと思います。何よりも、子どものことをより

一層好きになり、教師という仕事に対する思いが強くなりました。この経験を活かして、これから学習していきたいと思っています。

(むらやま はなこ・初等教育学科3年)





平成24年度都留文科大学公開講座

どくしょ

## よみ聞かせから読書の楽しさを

—新しいよみ聞かせの形 iPad、大型絵本、そして地域の昔話—

日向良和

平成24年度大学公開講座の一つとして、「よみ聞かせから読書の楽しさを」を市内4カ所にておこないました。今回は誌面をお借りしてこちらの概要を皆さんにご紹介いたします。

大学の公開講座でよみ聞かせ？と疑問に思われた方もいらっしゃると思います。よみ聞かせは通常、就学前の子どもさんか、小学生までが対象で、大学生にはよみ聞かせをすることはありません。

よみ聞かせが大学公開講座になる背景としては、都留文科大学が教員養成を中心とした大学であることと、昨年度より小学校で学習する内容を定めた「学習指導要領」の改訂された内容があります。新しい学習指導要領では、「言語活動の充実」として、小学校低学年では先生が授業で「よみ聞かせ」や「ブックトーク」（本の紹介）をおこないます。また、新しい教科書では単元に関連した多くの絵本や児童書、図鑑が紹介されています。

小学校の先生は、従来公共図書館の司書が中心となっておこなってきた「よみ聞かせ」「ブックトーク」などの技法を学び、授業で実践することが求められ、都留文科大学では、小学校国語教科書に紹介されている1000冊以上の絵本・児童書をそろえて、学生のよみ聞かせなどの練習に対応しています。

さて、その「よみ聞かせ」には多くの形式があります。一部を紹介すると、

**1 大型絵本**・新聞紙程度の大きさに大きく印刷して製本した絵本を使ったよみ聞かせ。

**2 大型紙芝居**・紙芝居1枚1枚が新聞紙を広げたくらいの大サイズの紙芝居

**3 エプロンシアター**・マジックテープがついたエプロンをつかい、物語キャラクターのぬいぐるみをエプロンに貼り付けながらお話をする一人劇。

**4 電子紙芝居**・iPadといったタブレットPCやスマートフォン、パソコンを使い、地デジテレビやプロジェクタで拡大し映示する紙しばい。

などがあります。特に電子紙芝居は紙芝居の中のキャラクターを動かしたり、音や声が出たりと、音や動きでも子どもたちに物語を伝えることができると新しいよみ聞かせです。

今回の公開講座ではこれらの新しいよみ聞かせの形を子どもたちや学生、父母の皆さんに例示体験してもらうことにより、従来のよみ聞かせと比較して効果を実感してもらい、問題・課題を示していただくことで子どもたちが積極的に読書に親しむようなよみ聞かせの開発につなげていくことを目的としました。

今回のプログラムは、大型絵本として「はらべこおおかみとぶたのまち」（宮西達也著）、iPadを使った電子紙芝居「ももたろう」、そして小学校二年生国語教科書に紹介されている地域の昔話として、北海道のアイヌに伝わる神話「カムイチカブ」のよみ聞かせをおこないました。8月は盛里地区、東桂地区、宝地区の学童保育の子どもたちを中心に、約120名の子どもたちにより聞かせをおこないました。

「はらべこおおかみとぶたのまち」では従来食べられる役が多いぶたさんと、食べる役の多いおおかみさんを入れ替えたコミカルな話で、多人数では絵が見えにくい場合でも、大型絵本ならば絵と朗読で物語を伝えることができました。

電子紙芝居「ももたろう」はiPadの操作で画面の桃太郎が動いたり音が出たりします。一度よみ聞かせをした後、子どもたちに話しの流れに沿ってキャラクターを操作してもらいました。子どもたちはその場面の内容を効果的に伝えるためにはどんな操作をしたらいいかを考えながら、キャラクターを大きくしたり動かしたりしていました。

「カムイチカブ」はアイヌの神様で、シマフクロウの神様と、通りかかったシャチの群れとのやりとりの話です。中盤若いシャチの無礼な振る舞いにと

んな報いがあったのかが物語の中心になります。地域に伝わる昔話などのよみ聞かせも新しい学習指導要領の特徴です。

子どもたちは、大型絵本ではオオカミの滑稽な姿に笑い、iPadを操作して物語を伝える楽しみを学び、アイヌの昔話では静かに物語に入っていました。3回を終えて読書の楽しみの一部を伝えられたかなと思っっています。

1月に最後、三吉地区での公開講座をおこないます。また学園祭でのよみ聞かせ会の開催や、来年度以降も同様の公開講座で、新しいよみ聞かせの形を示していきたいと考えています。

末筆ながら、都留市教育委員会、盛里・東桂・宝地区の学童保育の関係各位にはご協力をいただき感謝申し上げます。

（ひなた よしかず・本学情報センター  
教員）



## 「Hello! 小学生と英語で楽しもう!」 英語でワクワク2012」

奥脇奈津美

2012年8月20日、地域交流研究センター主催の市民公開講座の一環として、小学校3、4年生を対象に「Hello! 英語でワクワク2012」を開催しました。夏休みも終了間近でまだ暑いさなかにもかかわらず、都留市内の小学生13名が参加してくれました。「英語で自分のことを伝える」「英語の音やリズムに慣れる」「英語を楽しむ」「外国の文化を知る」という趣旨のもと、英語で自己紹介やあいさつをしたり、歌・ゲーム・チャンツを通して身体を動かしながら色、数字、動作に関する単語を学んだり、英語の絵本を楽しんだりと、3時間にわたって英語に触れる活動を行いました。

学生スタッフとして活躍してくれたのは私の英語教育ゼミに所属する英文学科の3、4年生5名と、昨年度の講座も手伝ってくれた元ゼミ生で現大学院生1名の計6名です。都留文科大付属小学校でTA(ティーチングアシスタント)として活躍している学生もいますが、ほとんどが普段小学生とはあまり関わる機会のない学生です。これまで何度も打ち合わせを重ね、前日は

ハリハーサルを行なうなど、準備を進めてきました。

講座開始直前まで人数が集まるかどうか心配していましたが、「こんにちは〜!」「おねがいます!」と明るい大きな声の小学生が続々と集まってきてくれました。教室に入るや否や、早速、「あつ、ボールだ!」と、準備した小道具で遊び始めるなど、元気で好奇心旺盛、パワー全開の子どもたちでした。はじめに行なった英語による自己紹介活動では多少緊張した雰囲気もありましたが、「英語で自己紹介をしながら名刺交換をし、それがいつの間にかビンゴゲームに変身する」という、アイディアに富んだ学生発案の活動が終わるころには、すっかり打ち解けていました。

それぞれの活動では2チームに分かれて得点を競い合いましたが、勝ったチームの賞品は大学生の手作り銀メダル(材料は麻ひも、段ボール、アルミホイル)。特別参加した5歳の私の娘も大喜びの、大きな素敵なメダルでした。講座後には簡単なアンケートを行いました。『英語でワクワク』はど



チャンツで読みながらのカード取りゲーム



英語の名刺作りの様子

うでしたか」という質問に対し、小学生全員が「たのしかった」を選択してくれ、「また、参加したいですか」という問いについても全員が「参加したい」と答えてくれました。これに気を良くし、また大変励まされ、来年度の企画を早速考え始めたところです。

以下、協力してくれた大学生スタッフの感想です。

「子どもたちが体を動かして、楽しそうに英語を使っていることがとても嬉しかったです。今後の糧となる貴重な機会を頂き、ありがとうございます」

た。」(青木洵都・英文学科3年)

「私は英語学習の活動をするという経験がなく、緊張しましたが、参加者も皆が熱心に取組んでくれ、楽しく取組めました。非常に良い経験が出来たと思います。このような機会を設けていただきありがとうございます。」(黄土展・英文学科4年)

「今回スタッフとして企画に参加し、児童の楽しそうな笑顔を見ることができて嬉しく思いました。このような企画を通して児童の英語に対する興味を引き出し、モチベーションを上げるきっかけになれていたら、光栄に思います。」(伊藤美咲・英文学科3年)

「英語でワクワクに参加するのは去年に引き続き今年で2回目となりました。今年は事前の練習不足などの反省すべき点もありましたが、当日は順調に進み、また子どもたちと楽しく英語を勉強できたのではないかと思います。」(高野祐一・大学院生)

参加してくれた「旭にここクラブ」のみなさんから、「えい語を教えてくださいありがとうございます」という大きな寄せ書きをいただきました。その中から感想を抜粋します。

「えい語を教えてくださいありがとうございます！自こしょうかいの時、えい語では少しむずかしかったけど、楽し

かったです。名し交かんはビンゴになるとは、思わなかったけど、おもしろかったです。またしようたいしてください。」

「えい語をいっぱい教えてくれてありがとうございます。ボールをなげるときにすうじをえい語で言つてやるやつも楽しかったです。また来年もしようたいして下さい。」

「わたしはえいごのじこしょうかい、ゲーム、歌、ぜんぶすごく楽しかったです。」

「じこしょうかいでは、名し交かんをしたあとまさかビンゴがはじまるとは思いませんでした。いろいろなゲームではまけてしまいました。すぐおもしろかったです。歌では、わたしは歌がすきなです。すぐリズムにのれました♪」

参加してくれた小学生、協力してくれた大学生スタッフ、参加者の募集などにご尽力いただいた事務局のみなさまに、この場を借りて御礼申し上げます。

(おくわき なつみ・本学英文学科教員)

地域交流研究センター・美術教室・山梨県立美術館共同企画

## アートの種まきワークショップ「アート巣箱をつくろう」を振り返って

館山拓人

これまで美術教室では、本学における教育・研究のほか、地域貢献の観点から地域の子どもたちの活動を支える取り組みについて模索してきました。ですがこの間、美術研究棟の耐震補強工事等のためなかなか企画準備に至りませんでした。本学専任教員の竹下

勝雄先生、鳥原正敏先生をはじめ、平成23年度より特任教授の酒巻洋一先生（現・常盤短期大学准教授）、中村伸也先生（笛吹市立春日居小学校教諭）、筆者（当時・本学初等教育学科非常勤講師）の参加により、ようやく具体的な立案に向かうことができました。

今回、本学地域交流研究センター・美術教室と山梨県立美術館学芸課教育普及との連携のもと、図工・美術によって子どもたちを取り巻く環境をどう創造的に作り出せるかという観点から、地域の小学生等を対象としたワークショップ「アート巣箱をつくろう」を企画しました。

この企画は、2010年より山梨県立美術館によって取り組まれている「とびだせ美術館！アートの種まきワークショップ」として、複数のプロダ

ラムから構成されているワークショップをもとに発案されました。2012年のテーマは、「空」であるため、本企画では、本学周辺に生息するさまざまな野鳥の様子を想像してもらい、世界に一つしかない「アート巣箱」を作ってもらうことにしました。

ワークショップの実施にあたり、美術教室の教員と同教室3、4年生を中心に巣箱の試作品を用いて数多くの協議を重ねました。その結果、巣箱の材料は地元の木材店で製材された杉板を使用し、制作については美術教室教員と学生が本学の設備を活用し行なうこととなりました。そして、ワークショップ前日までに用意されたおよそ200個の巣箱を用いて、子どもたちが絵の具やクレパス等で描画し「アート巣箱」を完成させるというかたちになりました。

7月15日（日）のワークショップ当日は天候にも恵まれ、当初の定員（100名）を上回る152名の参加者と、36名のボランティア計188名が集まりました。参加者超過のため、制作場所の確保など混乱も予想されました



が、参加者を2部屋に分けるなど教員・学生スタッフの機敏な対応で、大きな問題も無くスタートを切る事ができました。そして制作の手がかりとして、北垣憲仁先生（本学地域交流研究センター特任准教授）による本学周辺に生息する野鳥についてレクチャー

が行なわれました。このワークショップにおける大きな特徴は、木材や立体物に直接絵の具で描くことです。子どもたちは、目の前に置かれた木製の巣箱に思いを巡らしながら色とりどりの絵の具で表現していました。とくに印象的だった光景は、



「自分だけの色を作りたい」と試行錯誤している子どもの様子や、「どんな色を塗れば鳥がきてくれるだろう」「鳥もいけどリスにも入ってほしい」など、さまざまな思いを親子で語り合いつつ表現している姿が多く見られたことです。このように、今回、比較的短時間のワークショップにもかかわらず子どもたちの素直な気持ちが込められた作品が多く生まれたのは、おそらく、最初から立体として「巣箱」を目にする事で描画のイメージを持ちやすく、同時に自然素材である木のぬくもりが暖かさや優しさを演出し楽しく制作に取り組めたからだと考えます。制作を終え、作品と共に記念撮影をした時の親子の様子はとても清々しく満足した表情で、その姿がとても印象に残っています。

ワークショップで制作された「アート巣箱」は、7月29日（日）～8月11日（土）の会期で山梨県立美術館県民ギャラリーCと野外の木々に展示されました。会期中は多くのワークショップ参加者が来訪され、それぞれの「アート巣箱」を鑑賞されていました。「アート巣箱」が美術館という一つの空間に展示されることで、それぞれの作品が際立つとともに、互いのよさが響き合い、華やかな空間を作り出していました。また野外の木々にも巣箱が取り付けられ、夏の緑に染まった空間

を鮮やかに彩っていました。

今回、地域交流研究センターと美術教室が共同企画したこのワークショップは、地域貢献の新たな試みであるとともに、図工・美術の可能性を広げる有意義な取り組みであったと感じています。それは、定員をはるかに上回る参加者が「アート巣箱」に向かい合っていたことが物語っていますし、またそうしたニーズがあるということは、子どもたちを取り巻くさまざまな環境の中において、ものづくりという活動が根源的な意味を持つているということと結びつくのではないのでしょうか。今後、「アート巣箱」に入ってくれた鳥たちが、子どもたちと自然、美術・図工を結ぶ架け橋となればと願っています。

（たてやま たくと・本学初等教育学科、美術教室 特任准教授）



# 「都留ことばの会」・地域交流研究センター共催 学級づくりの向上をめざす実践講座

鶴田清司

今回の企画は、私が代表を務める

「都留ことばの会」のメンバーである渡辺幸之助先生（上野原市立島田中学校教頭）の一言から始まりました。

「学級づくりで悩んでいる若い先生方にベテラン教師のさまざまな実践知を紹介する機会を設けたのですが……」

学級づくりは学校教育の原点と言われています。学力の保障はもちろん、民主的な人間関係づくりや豊かな教室文化の創造の基盤となるのが学級です。しかし、その重要性が叫ばれるわりには、学級づくりの具体的な方法については学ぶ機会が少ないというのが実情です。大学のカリキュラムはもとより、学校現場に出ても、教員構成の関係で、ベテランの先生方の実践知が若い先生方に十分に伝わらないという問題があります。

全面的に賛同した私は、より多くの先生や学生たちに参加してもらえるように、地域交流研究センターとの共催として実施することになりました。10回の連続講座です。

第1回 4月28日（土）渡辺幸之助

「学級づくりの可能性とその方法」

第2回 5月19日（土）佐藤喜美子

「学級担任という仕事」

第3回 6月23日（土）清水浩喜

「保護者から信頼される学級づくり」

第4回 7月28日（土）金勝武鑑

「学級づくり・自治活動の原点」

第5回 8月18日（土）土屋賢一郎・花形章

「演劇・合唱・音楽活動を生かした学級文化の創造」

第6回 9月22日（土）白井明彦

「子どもの願いからスタートする学級づくり」

第7回 10月20日（土）石田二元

「音声言語を生かした活気ある学級づくり」

第8回 11月24日（土）横山裕一

「学級が好きになる、生活が楽しくなる学級づくり」

第9回 1月26日（土）三浦明仁

「小学校から中学校につながる学級づくり」

第10回 2月23日（土）杉本賢二

「4月から学校体制としてスタートする学級づくり」

土曜日の18時～20時という時間設定ですが、30名ほどの参加者があります。現職教員に交じって、本学の学生も参加しています。毎回、それぞれの講師の先生方の豊富な実践事例をもとに、単なる一方的な講義ではなく、グループ間の意見交換、さらに実技指導なども含んだ、きわめて実践的な内容の講座が展開されています。

参加した現職教員の声をいくつか紹介します。

○学級担任の頃、問題を抱えている生徒を大切にしていたし、大好きだったのに、学担を離れ主任の立場になった頃から、意識が変わったかも……とグサリと反省させられた。初心に戻ることを痛切に教えられた。

○日記指導はぜひ行なってみたいと思いましたが。つい、コメントを書く時間もないし……と違ってなかなかチャレンジできなかったのです。2冊用意して取り組みたいです。班長会もやったことはありますが、高学年をもつことができれば行なってみたいと思います。

（第3回講座・小学教員）

○子どもたちをとにかく「自立」させなければと感じていたけれど、「依存しながら」自立していくことは視点として持っていなかったため、この視点をもって学級づくりに臨みたい。

（第4回講座・小学教員）

○今年初めて学級の演劇をします。これまでの学校では学年劇だったので関わることも少なく、何から劇をつくればいいのか不安でした。今日の発声練習など実際にできて楽しかったです。学級集団をよりよくしたり個に光を当てたりするきっかけとして演劇指導をしていきたいと思いました。

（第5回講座・中学教員）

最後に、第6回の講座に参加した学生の感想を紹介しておきます。

（つるだ せいじ・本学初等教育学科教員）

この「学級づくり実践講座」は現場



## 特集1：子ども・学校が地域交流を支え促す

の先生方の実践が学べるということ  
で、毎回とても楽しみにしています。  
白井先生は「子どもの願い」をとて  
大事に学級づくりをされてきました。  
具体的には、学年のはじまりに、黒板  
に大きな枠をとり、子ども一人ひとり  
の願いを付箋で貼って、学級づくり、  
係決めの元としていました。さらに子  
どもだけでなく「親の願い」も積極的  
に取り入れて、より開かれた学級づく  
りをしていくことも印象的でした。  
「こうしたい」「こうしてほしい」とい  
う願いを学級づくりに生かしてきたこ  
とがビデオに映った子どもや親の表情  
から伝わってきました。

私は将来、人と人との関わりを大切  
にするクラスを作りたいと思っています。  
白井先生はまさにそれを実践して  
いました。子どもたちに何か問題が起  
きた時に、教師が介入することは簡単  
ですが、それをよしとせず、子どもた  
ち同士で声を掛け合い解決できるよう  
に、朝の会など日常的な取り組みから  
人間関係づくりを行なっていました。  
今まで漠然と考えていたことをより立  
体的にイメージすることができまし  
た。

(込室 さくら 初等教育学科4年)



平成24年度都留文科大学現職教員教育講座（「夏季集中講座」）が開催されました。

主催…地域交流研究センター

テーマ…教師の子ども理解と学習指導

日時…平成24年7月26日（木）～7月27日（金）

場所…都留文科大学 2号館101教室及び102教室

## 今年もまたやって来ました

曾根完樹

この講座を知ったのは、三年前でした。忍野山中教育協議会の体育部会で、都留文科大学の麻場（一徳）先生に陸上競技の指導の basics を教えていただく

機会がありました。その時、麻場先生のことを知りたくて都留文科大学のHPを見ました。その時、目に入ってきたのが、この「現職教員教育講座」でした。そして軽い気持ちで申し込みをしたのでした…。

三年前、田中（昌弥）先生の「学力とは何か」の講義は、日々の忙しさの中に忘れがちな本質の確認ができました。山崎（隆夫）先生の「子ども理解と学習指導」の実践は、私が向き合っている目の前にいる子どもたちという強いメッセージをもらいました。「音が苦」な私をも夢中にさせてしまう清水（雅彦）先生の技量と度量に度肝を抜かれました。

二年目は、何の迷いもなくメールで申し込みました。今年も聞いた山崎先生の「子ども理解と学習指導」の話。それに呼応するかなのような田所（恭介）

先生の社会科の「タコメーター」などの実践報告。鶴田（清司）先生から文学作品「ごんぎつね」の語りは、ごんを供養する兵十に始まるというアイデア。語りに戻る「ごんぎつね」の実践は「救い」のあるものになりました。そして、「五十を過ぎてから実践を志しても遅くない」との山崎先生の言葉に励まされ、今年も受講しました。その山崎先生の「子ども理解と学習指導」では「子どもと遊び、子どもと心を通い合わせる」ところから実践は始まるというも語られます。毎年新たな発見があります。今年も「Sケンで遊ぶ」でした。今受けもっている子どもたちとやりたいと思っていました。山崎先生は、昨年も受講している人がいるからと違う内容にして下さりました。写真集や絵本を使い、社会科の切り口でするアニメーションの実践に、わくわくしている自分がいました。理科の平野（耕一）先生は身近な道具を使った実験方法の提案でした。自分が知っているアイデアの再確認ができました。鶴田先生からは論理的な思考表現力を育てるために「根拠」と「理由」づけから自分の意見を出していくことを日常的に行なうことが大切であるとおっしゃっていました。その一つとして新聞を読み比べる実践を提案されました。新聞に載った写真から情報を「どう読んで自分の考えにまとめるのか」

を、学生になって考えることができました。

この三年間を振り返ると、たくさんのことを学べた自分がいます。そして、ここに来るもう一つの理由が学食です。食事を取りながらノートに目をやる大学生の姿に三十年ほど前の自分の姿とダブらせ初心に返れるからです。来年も都留文科大学のHPからの講座を申しこむ自分がきつといることでしょう。

（そね かんじゅ・山中湖村立山中小学校教諭）

注

1) 生きいきとさせる働きかけのこと

【第1日目】7月26日（木）	
午前9:45～午前10:00	【講座の趣旨について】 講師 松本 昌弥（地域交流研究センター長）
午前10:00～正午	【子ども理解と学習指導】 講師 山崎 隆夫（本学初等教育学科教授）
午後1:00～午後3:00	【教科に関する授業実践①】～子どもがわかる授業を作る（理科） 講師 平野 耕一（本学初等教育学科教員）
【第2日目】7月27日（金）	
午前10:00～正午	【学習意欲を引き出す学びづくり】～社会科教育を通して～ 講師 田所 恭介（本学初等教育学科教授）
	【英語科専攻授業のためのヒント】 講師 松上 謙（本学英文学専科教授）
午後1:00～午後3:00	【教科に関する授業実践②】～子どもがわかる授業を作る（国語） ～言語活動の意義を語るために～ 講師 堀田 清司（本学初等教育学科教員）



## 進み続ける教師でありたい

岡田直也

本学の「現職教員教育講座」を初めて受講しました。日々の学校生活のなかで、「授業をもっと充実させたい、もっと子どもたちが分かる授業を行ないたい」という思いがありました。

こうしたなか、ふと目にとまった案内が本講座でした。『教師の子ども理解と学習指導』のテーマのもと、「一人ひとりの子どもを理解することをベースに、子どもの思考や感情・感覚に即した学習のあり方を探る」という内容の趣旨でした。何かヒントになるのではないか、という思いで受講を決めました。

本講座では、二日間に渡りさまざまな講師の先生方から授業にかかわったお話がありました。一番印象に残ったことは、先生方の授業に対する熱意です。授業にかける熱い思いと比べてもよいかもしれません。一つの講座にかけるさまざまな工夫や準備。当たり前前と言ってしまうかもしれませんが、こうした姿勢を強く感じました。また、本講座を通して自分自身が学ぶということの楽しさを改めて感じるできました。さらに、他校の先生方の意

見や考えにも触れることができ、よい刺激となりました。

小学校では、新学習指導要領が実施され二年目になります。授業時数や指導内容も増えました。「ここでもう少し時間をとって子どもたちに考えさせたい」ということも時間との相談です。考えさせる時間がとれずに、時には「教えることで精一杯」、といった授業になってしまいうこともあります。「与えられた時間の中で、どうしたらより子どもたちが学ぶ楽しさを感じられる授業ができるのか」を日々考えています（なかなか思うようにいきませんが…）。今回の講座は、まず自身自身が学びの楽しさを実感することの重要性も、改めて教えてくれました。

私は、民間企業で勤務した後、臨時教員を経て三十代後半で教師になりました。こうした経歴も関わって、今後自分自身が「もっと学ばなくては（学んでいきたい）」と日々思っています。

私は今でも、年に一度は教育実習日誌を開くことがあります。そこには、「進みつつある教師のみ人を教える権

利あり」（ディーステルヴェーク）という言葉が出てきます。初心を忘れず、休みながらもいい、進み続けることのできる教師でありたいと思います。

（おくだなおや・上野原西小学校）



# 子どもたちと「ムリネモ」\*の森をつくる

## ―都留文科大附属小学校での実践から―

北垣憲仁

フィールド・ミュージアム部門では、昨年に引き続き今年度も都留文科大附属小学校と協力して4年生（15名）を対象とした授業を展開しました。フィールド・ミュージアム部門では、これまで身近な野生動物の生態にあわせた観察方法を研究し、観察会などで活用してきました。また

自然と人をつなぐ接点として、野外での研究をもとにアカネズミやカワネズミといった身近な野生動物と出会う装置や、ムササビやリスなどの出合いの場を作ってきました。自然ほんらいの生きいきとした姿に接することのすばらしさを地域の子どもたちとも共有したいという想いから小学校での実践が始まりました。

今年度の第一回の授業（5月29日）では、学校の校舎裏にある森を歩き、動物が食べた痕などを集めました。集めた標本は箱に入れ、誰もが見られるよう

に玄関の展示コーナーに置きました。第二回の授業（6月25日）では、当初ムササビをテーマに授業を展開する予定でしたが、森に設置してあった餌台に来ていたリスに偶然出会い、子どもたちとしばらくリスを観察しました。

第三回の授業（7月9日）では、前回、偶然に出会ったリスが餌台に来るにはどうしたらいいかを子どもたちと考え、倒木を活用した通り道をつくりました。子どもたちはこれを「リスの道」と呼んでいます。第四回の授業（9月26日）では、リスやアカネズミの食物として使うために、学校近くの河川沿いでクルミを拾いました。クルミはほんらいどんな場所であり、どのような形をしているのかが分かって感動した子どももいましたし、リスが河川の近くにあるクルミの木まで来ていることを食べ痕から発見した子どももいました。第五回の授業（11月1日）は、子どもたちからの要望が多かったアカネズミやヒミズと出会う工夫と一緒に考え、校舎裏の森に装置を設置しました。この授業では、昨年ケヤキに掛けた巣箱からムササビが顔を出している場面にも遭遇しました。

具体的な実践の内容については、附属小学校との共同による一連の授業を中心となって進めてくださった中込一雄校長先生と4年生担任の原田裕太先生に経過、子どもたちの感想などを含めて記していただきました。

\*「ムリネモ」とは、身近な哺乳類であるムササビ、リス、ネズミ、モグラの頭文字をとったもの。

（きたがき けんじ・本学特任准教授）



# 野生動物の出会いから環境教育

中込一雄

本校の校区は、市の東部を流れる菅野川の上流に沿って開けたところで、道志村へ通じる県道が通っています。学校周辺は山々に囲まれ豊かな自然が残されており、約4.6haの学校林もあります。また、本校は通常の公立小学校ですが、都留文科大学との関係は他の小学校以上に密接であり、協力を得やすい状況にあります。平成22年度から、こういった教育的条件を活かした環境教育を学校経営の重点項目として、特



色ある学校づくりをすすめています。

本校の環境教育は体験活動を重視した内容になっています。低学年はネイチャーゲームなどの自然に親しむ活動を中心に、中学年は裏山や学校林での自然観察など自然を知る活動を中心に、高学年は林業体験や植樹などの自然を守り育てる活動を中心に行なっています。

平成24年度の各学年の主な内容は計画も含めて次のようになっています。

- 1学年 学校林でのネイチャーゲーム
  - 2学年 学校裏の森での自然体験とネイチャーゲーム
  - 3学年 学校林での自然観察
  - 4学年 学校裏のエンカウンスペースでの野生動物観察
  - 5学年 林業体験と里山活用（椎茸の原木作りなど）
  - 6学年 学校林での植樹活動
  - 全校 学校裏の森での自然観察オリエンテーリング
  - 全校 森のコンサート
- この中でも、4年生児童が中心に行なっている野生動物の観察は本校を取り巻く自然環境や大学の支援がなくて



はできない特色ある活動です。都留文科大学の北垣憲仁先生に来ていただき、4年生を対象に身近な野生動物の授業をしていただきました。5月「裏山の野外観察」、6月「ムササビと食痕さがし」、7月「リスとリスの通り道づくり」、9月「リスのクルミ集め」、11月「アカネズミとヒミズ」、「ヒミズの観察」の6回実施しました。野生動物の標本や画像を見せていただいたり、エンカウンスペースづくりの指導をしていただいたり、毎回、目を

輝かせて学習に臨んでいました。また、野外観察時にリスやムササビに出会うということもありました。今後、希望者を対象にした夕方のムササビ観察会も予定しています。

これらの学習で、野生動物に対する関心はかなり深まっています。本校児童は、ムササビ、アカネズミ、リス、ヒミズといった一般的にはあまり身近に感じられない野生動物を、本当に身近な動物として感じるようになります。エンカウンスペースにおける野生動物との出会いが、自然全体を理解する入り口になることを願っています。

（なかごみ かずお・都留文科大学附属小学校校長）

# 都留文科大学附属小学校4学年うらやま観察について

原田裕太



5月29日(火)、はじめての北垣憲仁先生の来校に子どもたちは期待と不安の表情を見せていました。昨年度まで今の5学年がしていたうらやま観察やエサ台の管理を任せられることになった4年生は、初めて北垣先生を迎えての授業をする前から、えさやりなどをしてきていました。これからは自分たちがしつかり見守っていこうという気持ちを持ち始めたころでした。

1回目のうらやま観察会は、実際に学校のうらやまに行き、動物のいた痕跡をさがす機会になりました。うらやまに出かけられるだけで子どもたちは大喜びです。自然豊かな場所に住んでいる附属小の子どもたちですが、普段山に入って遊ぶことはほとんどなく、身近な自然の中で遊んだ経験は意外と少ないようです。まして足元に落ちていた葉っぱの中に、野生の動物の食べかけがあるとは気づくことはできません。何かをみつけては「こんなものをみつけたよ。」と先生に見せに来る子が後を絶ちません。そして、リスなどが松ぼっくりを食べた後に残る部分「森のエビフライ」をみつけては自分

のコレクションにしてみました。「こんな細いのがあった。」「パイナップルみたいなエビフライがあった。」いろいろな発見をしていました。

2回目の北垣先生の授業ではムササビの観察をするようになりました。附属小の校舎の窓からうらやまを見るとそこにはムササビの巣箱とリスのエサ台が見えます。子どもたちの日常にある自然の観察台です。ムササビの巣箱からは時々ムササビが顔を出します。昼間にも顔を出すことがあるので、子どもたちは休み時間や掃除の時間にムササビと顔を合わせることがあります。校舎と巣箱は10メートルにも満たない距離なので本当に目が合っているみたいに見えます。「かわいい。」と言っていた子たちですが、次第に「雨が降ると顔を出すよ。」と、どんな時に顔を出すのが話題になります。また、同時ではないが3つの巣箱全てでムササビを目撃したことから、「同じムササビなのか、別の個体なのか。」ということにも関心が向いてきていました。ムササビは基本的に夜行性です。巣箱から顔を出さない日が続くと子どもたちも関心が薄れていくようです。ときどき顔を見せると「ムササビが出てくるよ。」と子どもたちが教えてくれます。普段ムササビのくらしの痕跡をみつけることはできないので、「ムササビは何を食べているんだろう。」「ム

「ササビがとんでいるところを見たい。」と子どもたちは感想を持っているようです。

3回目の北垣先生との授業ではテーマはリスでした。リスは昼間も活動をするので、エサ台でヒマワリの種を食べる様子を見たことがある子は多く、一番身近に感じている動物です。観察

「リスの道」を増設する作業をしました。子どもたちと一緒に、間伐で出た長めの木の枝を落とし、エサ台の設置してある木に渡します。それをみんな



上げていく喜びを感じたようでした。うらやまのエサ台にはヒマワリの種とクルミの実を置いてあります。ヒマワリの種は4年生の学校園で育てたヒマワリから取ることができ、買っていただいたものだけでなく自分たちで用意したものをあげることができていました。クルミは前年度に用意してあったものがなくなり、どうしようかということになりました。

4回目の北垣先生との授業では、河原にクルミ拾いに行くことになりました。クルミが近くの川に落ちていたことに子どもたちは驚いていました。河原に落ちていたクルミの実は周りが茶色く変色しています。「これがクルミなの?」「リスの食べたあとがある。ここにもリスが来るんだ。」と新しい発見もできました。

クルミを自分たちで用意することもでき、エサについても興味が出てきた子どもたちは、ある日どこからかクルミを拾ってきました。「リスはクリを食べるか調べてみる。」と、エサ台にクルミと一緒にクリを置き、リスがクリの皮を歯でがしてから持ち去ることを知りました。子どもたちの行動が自主的になってきたことを感じました。

また、リスがエサ台にいと、気付いた子どもたちは今までのようにただ見ていただけでなく、「どこまでリスに近づけるか。」に挑戦し始めました。リス



が人間から逃げるとき、木から木へと飛び移りながらの動作の素早さに子どもたちは感嘆の声をあげていました。

5回目の北垣先生の授業では「ヒミズ」に焦点を当てました。しばらく来ていないかと思っていたヒミズも土の中で活動していることを教えてもらい、新たにヒミズの観察を始めました。実際に見られるときがあるのを期待しています。

子どもたちの身の回りにはいろいろな動物がいます。そして、たびたび出会っています。4年生の子どもたちがうらやまの観察を通し、野生動物への興味が高まってきているのを感じます。これからの学習のまとめにどのようにとりこんでくれるか楽しみです。

(はらだ ゆうた・都留文科大学附属小学校第4学年担任)

# 都留市環境教育副読本に寄せる

志村達男

待望の環境教育副読本が手元に届いたその日、これまで共に編集に携わった先生方の喜びの顔が目に浮かんできました。

本市小中学校環境教育研究委員会は、平成20・21年度に副読本第一部を、22・23年度に第二部を編集し、合冊した副読本をこの度完成させることができました。

きました。編集内容の検討から、原稿の執筆、資料や写真の収集等々全て委員の手によるものであり、思いが込められた副読本となったと思っております。編集委員の先生方のご労苦に対して心から感謝申し上げます。

本委員会は、平成9年度から各学校で環境教育に取り組んだ内容をまとめた環境教育実践集を発行してきました。

ゴミ問題、自然体験、水質検査、河川浄化、大気汚染、エネルギー問題、地球環境問題、食育等々幅広く取り上げられ、学習した内容も深みのあるものであり、環境教育に対する実践の素晴らしさを伺い知ることができました。

しかし、取り上げた内容は、各学校の取り組み方や扱った分野に偏りがあったり、散発的であったりと必ずしも継続的な学習とは言い難いものでした。全ての学校が一貫して継続して取り組み、体系的に学習するためには、環境教育副読本が必要であると考えました。

そこで、平成20年度から環境教育研究委員会を中心に、副読本の編集作業を開始しました。これには、都留市環境保全市民会議や都留文科大学と連携し、協力を仰ぎながら編集を進めました。とくに大学の先生方とは何度も打ち合わせを重ねるなかで、いろいろご指導やご協力を頂きました。改めて感

謝申し上げます。

編集方針として、都留市の環境が分る資料集として、環境教育に活用できる内容であること。ただし、子どもたちの能動的な態度を養うために敢えて懇切丁寧過ぎないように配慮したつもりです。自分たちの身の周り、都留にこだわり、都留の環境について、興味があることや疑問に感じたことを観察したり調べたり、また、体験を通して学んだことを元に「調べてみよう」「やってみよう」と実践的な環境学習に繋がることを望みます。

小学校5、6年生を対象とした環境学習での使用を前提として編集しましたが、結果として、1年生から6年生までの、生活科や理科・社会科などでも幅広く活用できる内容となりました。各学年ともこの副読本を、環境学習はじめ教科等の学習でも大いに活用し、「環境」への興味や関心を育てて頂けたら幸いです。

(しむら たつお・都留市教育研修センター教育相談員)







7月1日、放課後子ども教室(桂子子ども教室・宝つ子クラブ七里・三吉子ども体験教室・旭子ども教室)が初めて合同で活動を行いました。今回の活動は、都留文科大公開講座と連携した、社会学科の北垣(憲仁)先生による「都留は自然の博物館」です。放課後子ども教室が都留文科大の講座

## 都留市放課後子ども教室・ 都留文科大公開講座関連事業 都留は自然の博物館

長田元子  
渡邊和子

を取り入れるのは今年度初めてで、子どもたちが大学の施設を使って大学の先生に教えていただく貴重な体験となりました。

今回の活動は親子参加型で行ない、多くの保護者も参加しました。自然科学棟の実験室に入った子どもたちはまだ緊張していましたが、「ぼくの好きな動物は○○です。名前は○○です。○年生です」と、自己紹介をしっかりと、皆に聞こえるようにできました。その後、「裏山にはどんな動物がいると思いますか?」という先生の質問に想像を膨らませながら、裏山に出発しました。

外はあいにくの雨でしたが、その頃には子どもたちの緊張は解け、元気に裏山を歩きます。どんぐりや、穴のあいたくるみを拾い、モグラの通ったあとを見ました。

実験室に戻り、持ち帰ったどんぐりやくるみを見ながら、「小さなネズミがどうして硬い実を穴をあけられるの

か」を考えました。実際にネズミの歯を見て、歯に「鉄」が入っていることを知り、小さい体からはとても想像できなかつたので驚きました。また、ムササビやモグラのはく製を初めて見て触わり、「毛布みたいに柔らかい」「ひげがぴんとしてる」「目が小さいね」「でも目は見えないんだよね」とそれぞれ興味津々。実際に触ってみたあとは、映像でムササビ、リス、ネズミ、モグラなどの動く姿を見せていただき、モグラが川の中で泳ぎ、すばやく魚をとる姿にみんな大興奮です!

子どもたちはまさに博物館にいるかのように、自分の目で生き物の生態をみることで、先生に質問されるとき、先生に質問されるのと同じ感覚を、疑問に思うことは積極的に先生に聞いていました。「人間とは、違う力がある、みんな、かたちも持っている力も違



う。短い時間の中でも、さまざま動物の力を知ることができました。この北垣先生の言葉は、動物だけではなく、私たちひとりひとりにも当てはまることだと思えます。とても良い体験ができました。ありがとうございました。

(おさだ ともこ、わたなべ かずこ・  
放課後子どもプランコーディネーター)

# 都留市旭小学校親子環境学習会に寄せて

三枝泰子

「ほら、こっちだよ。」「わあ、かわいい。」防寒服に身を包んだ親子が見つめる先の黄昏時の空に、白い皮膜が鮮やかに浮かび上がります。例年十一月末にPTA文化部が主催するムササビ観察会での一コマです。

本校は、昭和五十八年より、学校近くの石船神社に閉じ込められたムササビの保護活動が続いています。ムササビが自由に空を飛び、山のえさ場までいける日をめざして、先輩から引き継



ぐ大切な活動です。毎週火曜日の長休みには、縦割り班の当番が、クルミやドングリを巣の近くに設置したえさ台にのせ、下に落ちた殻の清掃をします。そうした活動を題材にした本や絵本も出版され、過去には国語の教科書の教材にも取り上げられるなど、全国的に校名が知られています。

平成十五年度には、当時の環境省主催の全国野生生物保護実践発表会において優秀賞に輝きました。また、その後の継続した活動が認められ、平成二十三年度にも、社団法人山梨科学アカデミーから「山梨県科学アカデミー児童・生徒科学賞」をいただき、児童代表が活動の一端を発表しました。

そんなムササビとの出合いを大切にしてきた本校は、例年六月に、「親子環境学習会」を実施し、自然に関していろいろな角度から親子で学ぶ機会を設けています。

今年度は、都留文科大特任准教授の北垣憲仁先生を講師にお招きしました。「身近な自然との出合い方」という題で、ムササビ・リス・カワネズミなどの生態を紹介していただきました



た。剥製に触れたり、えさを食べている場面の映像を見たりしました。リスの歯を見て、大きくて赤くなっているのに気づき、中に鉄のように強い物質が入っていることや、モグラが体育館

一つ分のスペースで行動していることなどを学びました。どれもこれも大変興味深い内容だったので、四十五分の学習会があつという間に過ぎました。北垣先生が、赤外線カメラで撮影したカワネズミが餌となる魚を捕る場面を見たときは、会場に集まった親子から、驚きの声があがりました。北垣先生は子どもたちのつぶやきをうまく取り上げ、大変ソフトな語り口で、子ど

もたちの興味を引き出していました。

最後に「動物には人間と違う力がある。みんな精一杯生きていて、どれも偉いとかいうことはない。人間も同じなんだよ。」というメッセージが語られました。「今日見た動物は、この旭小学校のすぐそばにいるよ。」という北垣先生の言葉から、四方を山々に囲まれ、美しい自然に恵まれた盛里地区への思いを新たにすばらしい時間を共有することができました。

ムササビの保護活動を始めて二十九年度。これからも子どもたちが地域の自然と野生生物の保護に関心をもってほしいと願うとともに、新しい世代にも伝えながら、継続・発展させていきたいと考えています。

突然の講演依頼にもかかわらず、快く応じていただき、地域交流の一翼を担ってくださった北垣先生に改めて感謝申し上げます。

(さえぐさ やすこ・都留市立旭小学校 校長)



## 「ムリネモの森によろこそ」

山梨県北杜高校・講演会

土屋浩之

北杜高校では、「現代を生きる人間として必要な『課題を見つづける力』『問題を解決する力』『自己の考えを発信する力』を生徒一人ひとりが身につけ、豊かな人間性を養う。」という目標のもと、1年生～3年生の全生徒が1年間を通して体系的に総合的な学習の時間に取り組んでいます。1年生は「いのち」、2年生は「つながり」、3年生は「あした」というサブテーマがあり、テーマを意識しながら興味のある8分野(自然環境・福祉共生・医療健康・文学歴史・情報工学・国際理解と語学・地域社会・芸術)に分かれて学習しています。そのなかで、各学年とも年間2回～3回の講演を聴くことにしています。

今回は、自分たちの住んでいる地域の自然や環境などを考えさせようと思いい、2年生の「自然環境」「地域社会」分野の生徒31名に、北垣先生の「ムリネモの森によろこそ」を聴かせました。講演では、生物の生態、生物と自然や人間とのつながりについて学びました。以下は講演を聴いた生徒の感想です。



「今日はさまざまな生物の生態についての話を聞いた。どの生物も違った生き方をしていることを知った。驚いたことは、生物の絶滅のことだ。1種

類の生物が絶滅することで、他の多くの生物を絶滅させることになる。現在では、1日で絶滅する生物がものすごい数になることがわかった。原因が、人間だということを知ってとても残念な気持ちになった。私たちはもっと生物を大切にすべきだと思う。」「今日は『共生』についての講演を聴きました。身近な動物の魅力や生き方などを知ることができました。そして人間のせいで多くの動物が地球上から消えているということを知り驚きました。私たち人間は、他の生き物のことを考えて生きていかなければいけないと思います。とてもわかりやすい講演でした。」



他の生徒も同様な感想を書いています。生き物を大切にすることやエネルギーを大切にすることや節約することなどを考えた生徒が多かったようです。

今回の講演では、短い時間でしたが、教師側から生徒に考えてもらいたいことが十分に伝わったと思います。機会があれば、是非他学年の生徒にも聞かせてみたい内容でした。北垣先生ありがとうございました。

(つちや ひろゆき・山梨県立北杜高等学校「総合的な学習の時間」担当)

# 二年目を迎えた都留文科大学・環境ESDプログラム

坂田有紀子



ESDという言葉を知っていますか？最近さまざまな横文字略語が世の中に氾濫しているので、すぐにわからない方も多いかもしれません。ESDとは、Education for Sustainable Developmentの略で持続可能な発展のための教育という意味です。2002年の国連総会において2005年から10年間を「ESDの10年」とすることを日本が提案し採択され、ユネスコが中心となって推進しています。本学では、H23年度から環境ESD、つまり持続可能な発展のための環境教育を推進すべく本学独自の認証プログラム「環境ESDプログラム」をスタートさせました。このプログラムは平成19年度文科省(現代GP)採択課題「山・里・町をつなぐ実践的環境教育への取組・ようこそフィールド・ミュージアムへ」のなかで二年の月日をかけて検討・準備を重ねてきたもので、本学の「現代GP」の大きな成果の1つでもあります。

本プログラムは、環境に配慮した持続可能な社会の構築のために各種環境

分野で活躍できる人材を育成することを目的とし、①自然環境教育コース、②環境マネジメントコース、③ナチュラルライフコースの3つのコースから構成されています。学生は自分の興味や進路に応じてどれか1つのコースを選択し、それぞれのコースで指定された環境関連の科目・単位数を4年間かけて履修します。これらの授業科目は、





自然系、社会系、文化・歴史系、教育コミュニケーション系の4つのカテゴリーに分類されており、21世紀を生きる社会人の基礎教養として環境問題をさまざまな角度からバランスよく学べるよう配慮されています。

しかしながら、本プログラムの最大の特徴は、学内の講義（座学）だけで

なく、実習を課している点です。この実習は、地域の自然学校やNPOの活動にボランティアスタッフとして参加するというもので、実習先としては、学内では学生主体の農業サークル「たんぼクラブ」や、地域交流研究センターのフィールド・ミュージアム部門があります。学外では都留市宝の山ふれ



あいの里ネイチャーセンター、シオジ森の学校、キープ協会、ホールアース自然学校、国際自然大学校、グリーンウッド自然体験教育センター、ハローウッズ、国立中央青少年交流の家など実績のある自然学校と提携しています。

環境ESDプログラム2年目の今年、約70名の学生が本プログラムを受講し、約20名の学生が実習としてボランティア活動に参加しました。学生たちは夏休みや土日、放課後の時間などを使ってこれら自然学校が開催する自然観察会やキャンプに準備段階から関わり、さまざまなことを学んでいるようです。自然や社会のなかで出会った疑問や課題、そしてそれらを理解した

い、解決したい、というモチベーションは、大学における勉学をより能動的で主体的なものにするでしょう。大学で学ぶ「理論」と、地域や自然を舞台とした「実践」との往還は、学生たちに、より深い学びの世界を経験させてくれることと思います。

環境に関する総合的な知見と行動力をもつことは21世紀を生きる社会人の基礎教養として必須です。今後、環境に関する客観的・科学的な知識と判断力を身につけ、環境に係る各種の活動や対策を企画運営する力量を持った人材は、社会のあらゆる分野で必要とされるでしょう。本学の環境ESDプログラムを履修した学生たちが、自分の所属学科に由来する高い専門性をもちつつ、第二の専門として環境に関する高度な知識と行動力を身につけた社会人となってくれることを期待しています。

（さかた ゆきこ・本学初等教育学科教員 環境ESDプログラム運営委員会委員長）

# 人と土地が「生活」をつくっている

— 原発20km圏に生まれて —

佐藤久美子

私は都留文科大学社会学科を2002年に卒業し、その後ハースト婦人画報社にて建築・インテリアの雑誌『モダンリビング』の編集をしております。昨年の『モダンリビング』9月号に掲載した私の文章に加筆、修正いたしました。

2011年3月11日、私が生まれた町、福島県双葉郡にある楢葉町は、突如立ち入りのできない場所となりました。東京電力福島第一原子力発電所から約17km。東日本大震災により発生した原発事故で、私の故郷は「警戒区域」に設定されました。

事故発生直後、町民の多くは、町の南側に位置するいわき市、もしくは役場機能が移転した会津美里町へと避難していました。4月上旬、私は避難所のひとつになっていた福島県いわき市の中央台南小学校へと向かいました。ボランティア、というよりは、「隣のおばちゃんはどうしたかな？友達は？」と、小さな頃から一緒に過ごしてきた人たちの様子を知らずにはいられなかったからだと思います。それは半ば衝動的な行動でした。避難所となっていた小学校の体育館では、常時100〜350人ほどの人々が生活を送っていました。別の避難先から移動してくる方がいる一方、民間の賃貸住宅を借りて避難所を出る方も多く、その人数は流動的でした。

変動する避難所の人数に合わせて、避難者の有志が炊き出しを行いました。私の中学時代の友人のお父さんが「料理長」と呼ばれ、先頭に立って調理をしていて、私も毎日一緒に、食事をつくりました。昨日まで家に住んでいた人たちが、突然体育館の床に薄い毛布を敷いて食事をする光景は、やはりとても普通ではありませんでした。私も同様に体育館で寝泊りをしていたのですが、右隣は同級生のお母さん、左隣には小さい頃から髪を切ってもらっていた、パーマ屋を営む夫妻がいました。家族でも考えられないような距離感です。間に衝突などがつくられなかったのは、町が小さく、全員が顔見知り以上、「家族的」な関係性であったからだと思います。

避難所での暮らしは、町の人たちが強く、明るい



ことで、とても「平和」でした。それが体育館で生活する異常さをより際立たせていたように感じました。「おつきくくなったねー、お茶飲んでいきなよ、狭いけど(笑)」などと声をかけてくれるおばちゃんやおじちゃんがそこかしこの床にいました。当時日本には700万戸の空き住戸があるといわれていて、私には、なぜこの人たちが床で生活をしなければならぬのか、ずっとよくわかりませんでした。

しかし、町の人たちと生活を共にしていくうち、その理由が少しずつわかってきます。町民の避難は、避難所で自治体の指示のもとに行なっている方と、自主的に親類縁者を頼って避難している方に分かれ、わずか8000人の町民が、30以上の都道府県に分散し、避難生活を送っていました。私の家族もまた、千葉県で避難生活をしていました。これまで

とても密度の濃いコミュニティを形成してきた人たちが突然ばらばらになり、それぞれが孤立し、不安な生活を送っています。そんな生活が続くうち、お年寄りの中に、痴呆の症状が現れる方や、体調を崩して入院をする方が続々と現れたのです。住み慣れた「家」を離れ、地域社会が崩壊してしまつたなかで暮らすことが、人の生死を分けるまでの事態になることを、初めて知りました。私の祖父も含め、近所のおじいちゃんやおばあちゃんが見る間に衰弱してしまいました。「町の人たちがいるところにいたい」それはお年寄りでなくとも、地域と共に暮らしてきた人たちの切実な思いでした。だからこそ、皆体育館での生活をやむなく選択していたのです。

私は『モダンリビング』という雑誌の編集を通して、「家」と「生活」のあり方を考えてきたつもりでした。しかし、その本当

の意味と価値を知らなかったように思います。共同体の単位は、家族―地域―町と形成されています。それらを根底で支えているのが「場所」なのです。自分の生まれた町や暮らした場所を失っては、人は生きられない。実家の雑然とした佇まいや、友人と毎日のように遊んだ海、犬と散歩したあぜ道や学校帰りの夕暮れ。誰もが同じように積み重ねた些細な日常の「場所」が、「今」という生活を支えているのだと思います。

この文章を書いた2011年7月から、1年以上の月日が経ち、町と、町民の状況も変化してきました。今年8月に楡葉町は警戒区域が解除され、町民の出入りは自由になりました。そして現在、中間貯蔵施設の受け入れの可否で、町政は揺れています。震災から1年半の月日が経ち、町に帰るか、移住するか、選択を迫られているように感じます。しかし、私にとつての帰還は、10年後、20年後の単位ではないと考えています。何度かあった一時帰宅の機会に故郷を訪れました。そのとき感じたのは、私が「故郷」を「故郷」だと感じるものは、何一つ変わっていない、ということでした。家屋や駅舎、原発を含め、人工物はことごとくその形を変えていました。一方で海や空、山や川は、厳然と、ただ美しいままでした。そして「私の故郷は死んではいない、何度でも、やり直せる」と思ったのです。百年、千年、一万年、十万年先の未来、私の故郷が生物のいない空白の場所にならないように、今できることがあります。たとえ汚れた大地であっても、その場所ですつか生きたい。帰る場所があることが今を支えているならば、今未来の帰る場所のために、私は明日の選択をしたいと考えています。

(さとう くみこ・モダンリビング編集部)

右側ページ写真  
一時帰宅の際、子供の頃よく遊んだ町の海岸から撮影。南方に見えるのは、広野火力発電所。当日は天候がよく、防護服姿で海を見に来る町の人の姿も多く見受けられた。  
左側ページ写真  
実家からの最寄り駅・常磐線木戸駅の線路も錆びて、セイタカアワダチソウが育っていた。

社会学科・地域社会学会共催講演会（7月11日S1教室）

# 原発がもたらしたものは何だったのか

— 佐藤彰彦さんの講演を聞いて

川波寿樹

東日本大震災による福島第一原発事故の影響により、福島県飯館村では、震災から一年半以上たった今でも、避難生活を余儀なくされています。避難生活の長期化は被災地住民の疲弊を招き、また、生活再建の道筋はいまだに立っていません。避難生活がなぜこのように長く続くのか、どのような原因が考

えられるのかといったことを、実際に現地でフィールドワークをされた佐藤彰彦さんから伺う機会がありました。

飯館村の村づくりは、自らの暮らしを住民自身が自らの手で作っていくという特徴があります。佐藤さんによると、飯館村では1980年代から地域住民によって直接行政や政策に関与していく全国的にも注目される村づくりがなされてきました。この地域には「まदै」という言葉があります。漢字で表すと「真手」、手と手をあわせて、丁寧な心をこめて、という意味の言葉です。そこには人と人との絆を大切にしたい、ゆっくりとした田舎暮らしを地域住民自らの手でつくりあげていく村の営みがありました。しかし、そのような「まदै」の村も、2000年頃からの国の政策によって大きな転換点を迎え、これまでのように行政と住民が協力してきた村づくりの関係にはころびが生じ始めていたと佐藤さんは語られました。

そして「3・11」以降、そのころびは原発事故による被害や計画的避難によって、地域住民の生活に大きな問題として噴出していきます。佐藤さんは、

地域住民の中に、一刻も早い除染を行なって早くふるさとに戻りたい、という思いがある一方で、除染をめぐる放射性物質の心配や、避難先での生活再建を第一に考え、ふるさとには戻れないという地域住民の葛藤が生まれてきていると指摘されました。復興を担う行政はその板挟みになって、身動きがとれないままです。住民自らの手で創りあげてきたこのふるさとを失いたくないという思いで、差し迫った不安や矛盾が村全体をおおっているとも指摘されました。

原発は、私たちに大きな経済的な繁栄による豊かさをもたらしました。しかし、原発事故によって街や暮らしが簡単に奪われてしまうという現状を、私たちは現在進行形で目の当たりにしています。原発事故が私たちに何を問いかけているのか、本当の豊かさとは何だったのか、複雑かつ容易ではないこの問題を、より多くの人びとと共有し、議論し、問い続けていく必要があると、講演を通じて感じました。

（かわなみ としき・社会学科現代社会専攻2年）



佐藤彰彦さん。  
福島大学つくしまふくしま未来支援センター  
地域復興支援担当



# 被災地の再生は、地域住民の自立から

渡辺豊博

現在、私は、復興支援型・地域社会雇用創造事業に関わり、宮城県石巻市を中心とした被災地に毎週のように出かけています。この事業は、被災地において、起業や就業を考えている被災者を含め、企業家や大学生、若者などを対象として、私が関わっている静岡県三島市で5日間にわたり、グラウンドワーク三島の先進的な「現場モデル」を体験し、あわせて、社会的企業やマネジメント、ビジネスの知識などを学習して、その後、石巻市などの被災地において2週間の実地研修を行なうものです。

150名の参加者の内、都留文科大学の学生は20名が参加し、仮設住宅での仮設自治会の立ち上げや高齢者支援、心のケア支援、子育てセンターの補助

支援、仮設住宅への弁当配送、耕作放棄地での有機野菜の栽培補助、新規事業の支援活動など、支援者の顔が見える、多様な対面型の精神的・経済的支援活動、地域コミュニティの再生活動などの実地研修を体験しました。

また、被災地での「小さな産業」の創業を希望する起業家を育成するために、1人当たり上限250万円を50人に提供するインキュベーション事業も行ない、全国各地から2000人も応募がありました。残念ながら、都留文大の学生からの応募はありませんでしたが、被災者を含め、多くの若者・高齢者・地域住民が、自らの得意技を発揮して地域と個人の自立を図りたいと意欲

的で新規性・社会性のある事業が提案されていました。

私が散見する被災地での現実には、生活保護費や保証金の拡大など、個人の自立性を奪う、非生産的な「施しの施策」が蔓延しています。人はお金の大小では心が癒されず、元気になることはできないと思います。何事も

行政や他人に任せていては、地域経済の持続的・発展的な自立と復興は成就できません。自己責任・自己表現の無い毎日が続くと、人は心身ともに疲弊し、自分自身を失い、部屋に閉じこもり、地域社会とのつながりは希薄化し断絶していきます。

被災地での多種多様な地域課題に対して、真摯に向き合い、自発的に戦っていける問題意識や具体的な行動が求められています。私としては、都留文大の学生とともに、被災地での起業家の育成と支援に取り組み、1人でも、多くの被災者が自活できる自立てを具現化できるように支援したいと考えています。

最近、私は、83歳の元魚屋さんの女性を励まし、夫の死を乗り越え、小さな魚屋さんを開店させました。また、元飲食店関係の仕事をされていた女性は、カラオケハウスを兼用した居酒屋を、仮設住宅隣地に中古のコンテナを活用してオープンさせました。2人とも、顔つきが生き生きと変身し、声も大きく、元気を取り戻したようでした。人は、自分の得意技と経験知を発揮できる場を確保し、ささやかでもお金を稼げれば元気が再生できることを実感しています。自分のパフォーマンスが、人に評価され、喜ばれ、お金を貰える、これが人としての理想の生き方であり、生きがいだとも思います。

今後とも、一般市民、若者を対象とした起業家支援と支援ファンドの創設にも取り組んでいきます。学生もボランティア支援だけでなく、被災地で起業家になるのか、起業家を支援するのかなど、新たな支援のあり方にも興味をもち資質の研鑽を続けてください。

(わたなべ とよひろ・本学社会学科環境・コミュニケーション創造専攻教員)



子育てセンターで子どもたちと語りあう学生



耕作放棄地で有機野菜づくりにとりくむ学生

地域社会論担当教員が、岩手県の大槌町・NPO法人吉里吉里国でのスタディーツアーを呼びかけたところ、13名の学生から参加希望が寄せられました。5月と9月、現地での打ち合わせを経て、9月23〜25日にかけて、同NPO法人にお世話になり、震災津波による塩害と山火事とで傷んだ森の手入れを通じて、豊かな海を取り戻そうという事業活動の一端を勉強させていただきました。初日は、震災で亡くなられた方が40年かけて育ててきた民有林から切り出した立ち枯れ木の処理を、また二日目は「復興の薪」づくり、薪積みの作業に取り組みつつ、被災されたときのことや、その後の取り組み、これからの構想等、貴重なお話、胸迫るお話をうかがわせていただきました。参加者の一人からその様子を報告してもらいます。（田中夏子）

## 大槌町吉里吉里での 里山再生に学ぶ

藤原優紀

東日本大震災後、私は初めて被災地を訪問しました。およそ一年半が経過した地は、過去と現在と異なる生活ができてきている方もいるでしょうし、津波によって全てを失ってしまった方もいます。基礎し



か残っていない家の隣には、新築の家が建ち、反対方向を見ると仮設の住宅や店舗が並んでいました。非常に複雑な気持ちになりました。私の出身地である静岡県は、東海地震とそれに伴う津波によって大災害が起こる、と何十年も昔から言わ

れています。吉里吉里の特に海の近いエリアの様子や防波堤の残骸、遠くに積まれた瓦礫を目の当たりにして、将来の地元の姿を見たような気持ちにさせられました。この光景は忘れることはありません。NPO吉里吉里国での活動は、最初から最後まで初めての連続でした。不安定な斜面での枝や細い丸太の撤去、薪割りや薪積みといった作業はどれもみな体力と根気の要るものでしたし、時間を忘れるほど集中しなければこなすことはできませんでした。

大槌町を訪れた2日間は、あいにくの天候で雨の中での作業でしたが、そのほかにも実際にスギの木の伐採を見たり、理事長の芳賀正彦さんから震災時の出来事やNPO設立の経緯などのお話を聞けたりと大変貴重な時間を過ごしました。特に、避難した方々が撮影した映像を見せていただいたことが印象的でした。映像はもとより、音や声に衝撃を受けました。また、芳賀さんは、当時の状況を思い出すことはとても辛いですが、私たちのために詳しくお話ししてくださいました。時折、声を詰まらせながらも、広葉樹の植林をしたい、かつて豊かであった海を取り戻したい、といった未来の吉里吉里像を語るお姿は非常に力強く見えました。

森を復活させることは海を復活させ、いずれは自然を豊かなものにするに繋がっていきます。林業は、長い目で見て、少しずつ少しずつ階段のぼっていきような地道な業ですが、さまざまな立場の人々と手を取り合えば、理想の吉里吉里は遠くないはずです。

（ふじわら ゆうき・社会学科環境・コミュニケーション創造専攻4年）

# 防災マップ作りから見えてきたこと

梅崎靖志

集中講義「地域交流研究」では、学んだ防災の知識を活かして、災害発生時の避難経路がわかる防災マップと行動十力条づくりを行いました。災害発生時に、学生が自分たちの安全を守るために活用するものです。

災害発生時に命を守るためには、自分たちの身に何が起ころうかを知り、予測することが重要な意



味を持ちます。そして、災害現場でのエピソードや写真、震災後の調査データ等から学び自分との関わりを認識することで、災害発生時にどのように行動するか、何を備えればよいかなどの想像力が働くようになります。授業では、災害発生時の写真や調査データからさまざまな危険に関する知識・情報を学び、状況別のイラストを使って危険を予測するグループディスカッション等を実施しました。

減災のための基本は、自助・共助・公助です。その割合は、災害発生前の認識では1:2:7ですが、実際の災害発生時には7:2:1と逆転します(河田、2008)。自助とは、自分や家族等の命を救うことであり、災害発生直後の適切な行動が重要になります。共助とは地域の安全をみんなで守ることです。公助である被災地外部の自治体や自衛隊等からの支援が本格化するまでの数日間は、共助で支え合うことが欠かせません。

防災マップ作りでは、大学構内および学生が住むアパートが集中する大学周辺を踏査して、危険個所の確認を行いました。地震と大雨によるがけ崩れや土石流では危険個所が異なるため、防災マップは「地震用」と「がけ崩れ・土石流用」の2種類を作成しました。

災害発生時に何が起ころうか想像力を働かせながら現地を歩き、情報を地図に書き込んでいきます。調

査を通じて、「普段は何気なく歩いている道に危険が潜んでいることに気づいた」「入手した情報を自分に置き換えることで、生きた情報になる」等の気づきがありました。また、「学生の防災自治組織を作り、大学と協力できる体制を作れないか」「今回作成した防災マップを見ながら、新入生を連れて現地案内する」といった意見も出ました。

防災・減災の基本となる自助・共助・公助を機能させるためには、大学職員と学生が協力し合える関係づくりが重要です。そのための具体的に小さな行動を見つけて取り組み始めることが、災害発生時の被害を最小限にするはじめの一步となるでしょう。そして、今回作成した防災マップと行動十力条をどのように活かしていくかが、次の課題であると考えています。

(つめぎき やすし・本学非常勤講師)



参考文献：河田恵昭(2008)・『これからの防災・減災がわかる本』岩波書店

この春から夏にかけて、身近な地域の課題を、市民、学生、市役所職員等、さまざまな立場の人が集まって話し合う「熟議」が開催されました。そこから生まれた団体「Re: Tsuru」では、「熟議」がひと段落した後、まちづくりのアイデアを具体化する取り組みに入っています。本学学生が、話し合いや活動に積極的に関わっている様子をお伝えします。

## コラージュ COLLAGE\*

山名花苗

リツール (Re: Tsuru) って何? どんなことをしているのかほとんどわからない状態で慣れないスーツを着て今年4月の定例会に初めて行ったことを今でも鮮明に覚えています。

そのリツールのなかで今「うぐいすホールの野外ステージの利活用」というプロジェクトが進行し、去る8月11日に第1回目の整備作業を行いました。今回の作業テーマは、「無から有への第一歩!」のテーマで草抜き、コケ取り、腐った土止めの木を抜く作業を行いました。急な作業日程でしたが、普段のリツールのメンバーだけでなく環コミの学生や市役所の人、山梨プロレスの方も作業に参加して頂いたり山梨日日新聞の方が来て取材して頂いたり多くの人がサポートしてくれて嬉しかったです。

このプロジェクトは、整備するだけでなく活用するために大学のサークルや市民と団体を作り、前のような草だらけのステージにしないように努めます。私もまだまだやれることは、微々たること

ですが、リツールのメンバーや市役所の方、市民の人たちに支えてもらいながら頑張っていて、この場所からみんなの幸せを生みだしていきたいと思っています。

(やまな かなえ・社会学科環境・コミュニティ創造専攻1年)

\*リツールを通じて、いろいろな人のかかわりがパズルのピースのように散らばっていて、それを形にしている場所にしていきたいとの思いで命名されたチーム名

## 「熟議」について

北出雅也

私が「熟議」という言葉に興味を持ち始めたであろうその頃、都留市において新たな街づくりに挑戦する「Re(リ):Tsuru(ツール)」という団体の存在を知った。この団体の目的は「産学官民の垣根を超え、熟議を重ねて都留市の課題と、その解決策を思考し実行していく」というものである。この団体の目的を知った私は、熟議に基づき街づくりに参画することができるということで興奮し、すぐに「熟議」参加の意を決した。(現在は熟議過程を終え、実行段階に移行されている)

本稿では「Re(リ):Tsuru(ツール)」での「熟議」を少し振り返り、「熟議」という言葉の有する意義について簡単に探ってみたいと思う。

まず、「Re(リ):Tsuru(ツール)」における「熟議」過程について。この熟議過程で「点特徴的(画期的?)」だったのは、話者の発言に対し、否定するこ

とはなく「イイネ。」という言葉で受け入れる、というものであった。このルールがあることで、参加者の発言内容に対するハードルが高くなることはないのももちろん、参加者の意見発表を促進するようなものであったと思われる。そのため、熟議の場としては各人の積極的発言を可能とする良い雰囲気になってきたように感じられた。

次に、「熟議」の有する意味について考えてみたいと思う。熟議の意味について、広辞苑には「よくよく評議すること」と記されている。このような意味を有する「熟議」をさらに「熟」と「議」に分け、それぞれの含意を探ってみる。そうすると、「熟」には「注意してものを見る」という意が含まれており、「議」に関しては「理由をつけて話し合う」という意が含まれていることが分かる。以上を踏まえ、少々考察を加えること「熟議」の有する意義とは「論点について注視し、各々が十分に意見を出し合い、議論の身を練り上げる。」ということになりそうである。

以上を踏まえ、「Re(リ):Tsuru(ツール)」の目指す新たな街づくりというものを考えると、計画自体の練り上げに上限はないように思われる。このため、街づくりに関する「熟議」過程は継続的に、且つ計画の実行に随伴する形で繰り返し行なわれることが必要であるように感ぜられる。そして何より「Re(リ):Tsuru(ツール)」の目的そのものが非常に素晴らしいものであるがために、「Re(リ):Tsuru(ツール)」に今一度「熟議」を期待せずにはいられない。そうすることで、より良い都留の街が創出されればと思う次第である。

(きたで まさや・社会学科地域社会専攻)

環境コミュニケーション創造専攻の授業には、学生たちが自主的にグループを作り、活動や学習内容を企画し、それを実践する「プロジェクト研究」という科目があります。その「プロジェクト研究」に取り組む学生たちから、活動成果報告を寄せてもらいました。

# 学生グループ「創志相愛」がつなぐ 地元商店街と文大生

原 大貴

私たちが「プロジェクト研究」のために去年結成したグループ「創志相愛」では、都留市駅周辺の三町商店街にて、地域の方々とのかわり合いを大切にし、商店街の活性化に協力することを目的に活動しています。

その活動の一環として、5月13日（日）に都留市の西涼寺で開かれた「儀秀稲荷例大祭」というお祭りの運営サポートを行いました。さかのぼること昭和24年5月13日、都留を大きく揺るがす「谷村の大火」が発生しました。その時、西涼寺に置かれていた「儀秀稲荷大社」だけは焼失を免れたのです。そのことから、「厄除け」の意味づけを持つ儀秀稲荷大社の祈願祭であるこの「儀秀稲荷例大祭」が行なわれるようになりました。

儀秀大祭での、私たち「創志相愛」の役割は「文大生にお祭りに参加してもらう！」というものでした。そこで私たちは、文大の各学生団体に露店の出店や、ステージ演奏への出演をお願いし、当日は儀秀大祭の運営スタッフと、学生団体との仲介役としてお手伝いをしました。学生団体の皆さんの協力のおかげで、儀秀大祭は大きな盛り上がりを見せました。それでは、お祭りの様子を写真とともに紹介していきます！

そうし そうあい



①前日12日に商店街の方と一緒に職をつける木の棒を立てる等、準備作業を行いました。そして当日、事前準備の後にお寺の方が僕たちに用意してくれた朝ご飯です。ウニや牛肉が入ったおにぎりはとてもおいしく、商店街の方は「このおにぎりが楽しみで毎年準備がんばってたんだ！」と話してくれました。

②今回のお祭りでは、文大農ネット、workwaku都留、FWSの3団体が出店。文大農ネットは、きな粉の実演販売、workwaku都留は、手作り小物の販売、FWSは、食器の販売をしました。実演コーナーでは、実際に炒った大豆を石臼でひいて、きな粉にするという体験ができました。地域のみなさんは「懐かしい！」ときな粉作りを楽しんでいました。



③その他、輪投げコーナーも設置し、ここでは、地域のみなさんに楽しんでもらいました。景品が取れるのがうれしくて、何回も挑戦する子どももいました！ちなみに輪投げスタッフは「プロジェクト研究」メンバーの宗村君です。

④夕方、人が集まってきた頃に、境内にてステージ演奏が行なわれました！まず学生バンドのUnionbeatが、夕暮れの西涼寺にいいムードを作ります！次にマンドリンクラブの美しい音色が西涼寺中に響きわたり、最後に吹奏楽部が会場が一体となるような演奏。



⑤儀秀大祭終了後、商店街の方々、住職さんと一緒に撮った写真です。お祭りの運営に関わらせてもらったことで、とてもいい経験ができました。みなさん本当にありがとうございました。（はら だいぎ・社会学科環境・コミュニケーション創造専攻2年）

# 文大農ネット企画「朝市@文大」オープンキャンパス編の実施を終えて

崎田史浩

7月21日、本学オープンキャンパスにて、文大生農業ネットワーク（通称・文大農ネット）主催の「朝市@文大」を開きました。

文大農ネットは、都留文科大学の学生を中心に農に携わるサークル・団体が集まり、各団体同士の交流や連携を図るためにつくられたネットワークです。それまで単独で行なっていたイベントに他団体を誘い合ったり、参加団体での交流会を企画したりと、団体間での学生の行き来がとて活発になりました。

文大農ネットの主な活動のひとつに、「朝市@文大」があります。都留市内で「農」の実践を通して学んだことを、実際に手づくりした農作物の販売や活動紹介を通じて、学生や市民に伝えていきたいと、2011年8月から定期的に開催してきました。

今回は、「農」に関心を抱き、自らチャレンジしている学生がたくさんいることや、大学周辺には「農」に関わっているような環境や風土が身近にあるということ、オープンキャンパスに来てくださった高校生や保護者の方々に知っていただければと思い、企画しました。当日は、本学1号館ホールの下にスペースを設けて、それぞれ育てた野菜を持ち寄っての販売や各団体の取り組みをまとめた冊子を配布するなどして、私たちの活動を紹介しました。ジャガイモ・モロヘイヤ・キュウリ・ナス・ダイコンなどの夏野菜を売りながら、畑で栽培したシソで

作った「シソジュース」の無料提供や、昨年収穫した大豆を炒って味見していただけるような工夫を凝らして臨みました。

積極的な声かけや活動紹介用のパンフレットの配布が功を奏したのか、高校生をはじめ保護者の方が足を止めたり、「大学で農業やっているの？」と立ち寄ってくださったり、私たちの活動に色々と反応を示していただけました。

参加した各団体の学生も、自分自身で作った野菜が売れたことに喜び

を覚え、また、都留市で出来る「農」の実践者として、実際にどう都留と関わっているかを紹介するなどの交流の機会も十分に持てました。また、本学関係者の教員や学生、事務員の方にも、学生が主体となつてさまざまな「農」の形が芽生えつつあることを、具体的な野菜販売活動を通じて広く発信する機会ともな

ったのではないかと確信しています。

今後とも、文大農ネットでは、学生の意欲的な「農」活動を今回の「朝市」企画や、メンバーがやってみたいと思う企画を出し合いながら、農と学生生活のメリハリつけながら楽しんでやっていきたいと思えます。

（さきたふみひろ・社会学科環境・コミュニティ創造専攻4年）



# 企画展「都留、地名の旅

## ― 郷土の記憶をめぐる ― を開催して

会期…2012年6月3日～7月15日

場所…ミュージアム都留

森屋 雅幸

現代の地域は、高度経済成長期を画期とした土地の  
変化や合併などにより字名や旧町名といった古く  
から地域に残されてきた地名は影を潜め、私たち自  
身の生活にとってその大部分が瑣末なものととなつて  
きているのが現状です。これら地名はその土地の性  
質や歴史を語り、現代の私たちに過去の地域の姿  
を伝える貴重な遺産であると考えられます。



例えば、都留文科大学の近くに残る「親の沢」と  
いう地名は60歳になつた親を一旦、この沢に  
捨てて、また連れ帰り  
隠居させ、余生をのん  
びり過ごしてもらおうと  
いう風習があったこと  
が由来とされます。か  
つてこの地で生きた  
人々のどこか温かみに  
満ちた人に対するまな  
ざしを感じることが  
できます。地名は地域

で語り継がれてきた風習や伝承に基づいており、ま  
さに人びとの記憶の集積といつて過言ではないでし  
ょう。

展示タイトルの副題に「郷土の記憶をめぐる」と  
あるように、この企画展では地名の展示を通して過  
去に生きた人々の記憶の集積をめぐる、時代に埋も  
れた地域の姿を明らかにしようとすることを意図と  
しました。地名という目に見えぬものを題材とする  
ため、展示は平成22年から24年にかけて都留市郷土  
研究会が実施した都留市内の地名調査の成果をご提  
供いただき、当館で所蔵する江戸期の村絵図や市内  
の発掘調査の出土品を中心に用いて地名を多角的に  
とらえた構成にしました。

また、本企画展は日頃から郷土史を研究する市民  
の方々の研究成果を広く知っていただく機会にもし  
たいという意図がありました。これは展示だけでは  
実現しきれず、関連イベントの中のデザインを考  
えました。そこで関連イベントで、郷土史を研究す  
る市民の方お二人を招きご講演いただきました。都  
留市郷土研究会の内藤恭義会長に「地名調査から明

らかになったこと」、都留第二中学校3年の上原梨  
乃さんに「古代都留郡の謎」という題目で郷土に関  
する研究成果をご発表いただき、当日は50名もの参  
加者に恵まれ好評の内に講演会を終えることができ  
ました。

今回の展示は総合的にみれば、人と人、人と地域  
(自然、風土、歴史をふまえたトータルな人間活動  
の場)をつなぐことを意図した企画でした。このテ  
ーマは平成23年の企画展「谷村大堰と人々の暮らし」  
から引き継ぎ、育んできたものでもありました。こ  
れからもこのテーマを抱いて地域と市民の方々の結  
節点となりうる博物館をつくりあげていきたいと思  
います。

(もりや まさゆき・都留市教育委員会学びのまちづく  
り課文化振興担当)



# 分かち合う楽しさを 知る観察会

鈴木陽花

地域交流研究センターのフィールド・ミュージアム部門では、地域の方や学生を対象とした自然観察会をおこなっています。自然観察会はおもに季節ごとに開催されており、今年度はこれまでに5月20日（日）と7月7日（土）に開かれました。

自然観察会が近づくと、教員と学生スタッフが事



前に当日のコースを歩きます。そして、どんな植物や生きものを観察できるか見てまわり、紹介するものの担当を決めます。下見が終わると、学生スタッフはそれぞれが紹介するものについて調べ、分かりやすい解説の方法を考えます。発表のさいには、図鑑に載っている内容を紹介するだけでなく、その植物を実際に見て驚いた点や感動した点を伝えることを大切にしています。

今年度の自然観察会は都留文科大前駅を出発し、うぐいすホールの脇から山道に入り、尾崎山の都留自然遊歩道を歩くコースでした。学生スタッフが参加者の皆さんの間に入り、会話をしながら散策します。会話をしていると、自然に興味のある方が多いことが分かります。なかには学生スタッフよりも山歩きに慣れている方や、里山の植物について知っている方もいらっしゃいました。そのため、学生スタッフが解説するだけでなく、参加者の方から教えていただく場面も多くあります。2回目の観察会のさいには、昔はカエルを食べていた話や、この辺りではヒキガエルのことを「ゴトンベエ」と呼んでいたことなどを教えていただきました。

私は二度の観察会にわたって外来種の「ピロッドモウズイカ」を紹介しました。その名前にもある通り、ピロッドのようなふさふさした手触りの葉が特徴の植物です。その葉をじっさいに参加者のみなさんに触っていただきました。ほかに手作り紙芝

居で生長の様子を紹介しました。人前で話すことはとても勇気のことです。しかし、参加者の皆さんの「なるほど。」といった声を聞くことができたり、興味深い表情を見ることができるとうれしくなります。

この自然観察会の魅力は、一方的ではなく、双方向的にその場にいる人たちが情報を共有できることにあると感じます。そこにはひとりです山道を歩いた時には気づかなかった発見や驚き、得られなかった知識など、新しい収穫がありました。自然観察会を通して、私は都留の自然の素晴らしさだけでなく、それをみんなで分かち合うことの楽しさを感じました。次回以降の自然観察会も積極的に参加していきたいです。

（すぎき はるか・初等教育学科3年）





地域教育相談室主催 公開講座 2012年6月8日(金)

## 演題 「中高校生のネットいじめやトラブルの実態と対応のヒント」

ネットいじめ防止に向けたツールの開発を通じて

講師：株式会社KDDI研究所・研究主査 本庄 勝先生（工学博士）

# 「いじめ」問題を考える視点を学ぶ

杉本賢二



現在の中学生の人間関係はとも浅くてもろい傾向にあります。「友達っこ」「感情中心の希薄な人間関係」などのことばに集約される面をもっています。講演では、精神的につながっていたくて、帰宅後もネットで発信し続けている生徒が多い現状が報告されました。だからこそ、今、学校教育で重要なのは「学級は社会の縮図」であるという認識のもとで、認め合い、支え合い、励まし合える人間関係をつくることだと感じました。

次に感じたのは「事実」を知ることの重要性です。「事実」が無ければ指導はできません。たとえ指導したとしても「適切」な指導にはならないと思いません。

多くの生徒が、帰宅後もコミュニケーションの手段としてネットを利用しています。プロフ・ゲスブ・リアル<sup>1)</sup>もはや「興味や関心がない」では済まされることが分かりました。帰宅後のネット問題が、そのまま学校に持ち込まれており、命を奪われる事件も発生しているのです。ネットいじめ問題も、いつでも、誰にでも、どこの学校に起こることを実感しました。

3つめはいじめを防止するために大切なのは「情熱・徹底・継続」だということです。今回の講演で特に心に残ったのは、講師の本庄勝先生の、いじめ防止への情熱と、あくなき探究心です。具体的には、他校生も含めた帰宅後の生徒の人間関係を、ツールで事実や手がかりを知り、対応しようとする発想と努力です。しかし、これは本来現場の教員こそがもつべきものだと思います。つまり、私たち教員によるネットいじめやトラブルの早期発見と適切な指導、情報モラルの育成、関係機関との連携の徹底と継続が大切なのです。

最後は、いじめを予見し回避できる生徒の育成が必要なことです。残念ながら、いじめをゼロにはできません。それは、被害者が精神的な苦痛を感じればいじめは成立するからです。今後はいじめの件数に対する「解消率」が重要になってくるでしょう。そのためには、いじめを早期に自覚し、時と場に応じてさまざまに自分で対応できる生徒の育成が望まれるのではないのでしょうか。

(すぎもと けんじ・道志村立道志中学校教諭・研究主任)

注

1) 「プロフ」とは、プロフィールの略称で、Web上に名前、誕生日、性別、血液型、星座や趣味といった自己紹介のための項目を書込み公開するサービスのこと。

「ゲスブ」とは、ゲストブックの略称で、Webサイトへアクセスしたユーザーが、訪問履歴としてのコメントを残せるサービスのこと。

「リアル」とは、リアルタイムの略称で、「リアルタイム日記」「リアルタイムブログ」と呼ばれることもある。自分の気持ちや状況を、テキストや絵文字、画像やスタンプ等を使ってリアルタイムに更新して友達など身近な人に見てもらおうサービスのこと。

都留文科大学フィールド・ミュージアム協力事業

# 地域探訪を楽しむ「富士道歩き」

内藤恭義

「富士道を歩く会」は、都留市郷土研究会と都留文科大学フィールド・ミュージアムが共同開催する事業で、地域を調べようとする者にとってきわめて基本的な理解をはかることを目的としております。

都留市郷土研究会は、ミュージアム都留との協力事業として古文書教室、歴史教室、民俗教室などを開催し、より深い調査や研究の成果をあげるべく基本学習をしたり、機関誌『郡内研究』で個人の研究成果を発表しております。都留市立図書館とは夏休み中に出される自由研究の相談に応じた協力事業があります。「富士道を歩く会」は、フィールド・ミュージアムと共同しての大学との協力事業と位置づけて今年（2012年）5月からスタートしました。

参加は自由ですが、郷土研究会員とフィールド・ミュージアムの機関誌『フィールド・ノート』を編集する学生、教員が主体です。「歩く」ですが、鍛錬のための歩きでももちろんありません。歩くことによって何を得ようとするのか目的はそれぞれです。道筋の変化を知りたい、道筋の公共施設を調べたい、石碑などから進行を、地形と集落の形成を、地域の動植物は…。各人各様でノートへの記録もさまざまです。



たずねる道は、江戸時代の村単位で、1回につき1村です。準備されるものは、江戸時代の村絵図、当日の該当地の地図、甲斐国志記載の村、神社・寺・古跡などの説明書きや『都留市地名辞典』での村名や小字名の説明書きなどです。

これらの資料をもとに、主として郷土研究会会員で村調査にあたった者や地域の有識者から説明をいただいたりします。

例えば、今度行なわれる四日市場では、集落がなぜ山陰やまかげに存するのか、「市場」と名が付くことから考えられる歴史、なぜ遠い地域の上谷村や下谷村おいでしんじやでが生出神社うぶすながみを産土神としているか、あるいは住宅分布状態から見て現在の大変化を認識し原因を探るなど、さまざまなテーマを含む実地の探索になるかと思えます。「富士道歩き」が学生の地域探訪の一方法として役立つことを期待しております。

（ないとう やすよし・都留市郷土研究会会長）



# 富士道の「先達」に学ぶ

牛丸景太



その昔、富士山を信仰する人々が「御山」を目指して歩いた道―現在の大月市にある甲州街道との追分から、富士吉田



市にある富士浅間神社へ至るこの道を、私たちは時間をかけてじっくり歩いています。一緒に歩いてくださる都留市郷土研究会の方々は、土地のことを熟知した案内役、いわば富士道の「先達」です。おおむね現在の国道139号線に沿って進みますが、ときにはルートをはずれて寄り道をすることもあります。第三回（7月29日）の小形山散策もそうでした。富士道を歩くという観点では進捗していませんが、私はこの回がとても印象に残っています。

富士急行線 田野倉駅前を出発してやってきたのは富春寺というお寺。桂川にかかる舟場橋を渡り、やや急な坂を上ったところに本堂があります。ここでは本堂が建てられている「向き」（方角）が話題になりました。富春寺は集落の一番端、桂川を背にした崖の淵に建てられています。つまりこれは、富士道方面に背を向けていることにも等しく、私たち一行

はお寺の裏から坂を上ってきたことになりました。

内藤さんは、このお寺の「向き」が、より古い時代の道を推定する手掛りになるとおっしゃいました。さらに、道は高いところから低いところへ変遷していく傾向があるのだとも。要するに、私たちが歩いてきた道は比較的后代のもので、それよりも昔の道はもつと山側のところに通っていた可能性が高く、富春寺の「向き」はこの古道に対応していたのではないかと考えられているのです。これを裏付けるのが、境内から山側に少し歩いた場所にある「萬霊等（塔）」という石碑です。この種の石碑は私も各所で見ましたが、じつは寺院の入口に建てられることが多いらしく、近くに古道が走っていたことを物語る一つの資料として見ることもできるのだそうです。

お寺の「向き」や路傍の石碑から、古道の存在を考える。まさに点と点をつなぐ作業だと感じました。長年郷土史と向き合ってきた方々と私たち学生とでは知識の量はもちろん、同じものを見るにしても見方や目の付けどころには違いがあるようです。この先、経験豊かな「先達」たちから学べることは、どんなにか多いことでしょう。史跡に関連する一つひとつの事象を拾うだけに留まらず、それらを総括してどう見ればよいのか。そういった視点も少しずつ学んでいければよいのか。そういった視点は、まだ始まったばかりです。

「富士道を歩く会」については、『フィールド・ノート』74号にも報告がありますので、ご参照ください。

（つしまるけいた・国文学科3年）



12.11.9  
 Yoda

## ●● 編集後記 ●●

毎朝の出勤が楽しみである…と書くと驚かれるかもしれない。大月駅から富士急に乗って大学方面に向かう車窓から、あるところでは右手の山並みの向こうに、あるところでは左手の田畑の先に、またあるところでは正面の駅舎の奥に…と、さまざまな角度から視界に飛び込んでくる富士山の雄大な姿は、出勤のひとつを実に豊かなものにしてくれる。しかしその雄大さ、美しさが、何に起因するものなのか、想像したこともなかった。上杉陽さんの巻頭言は、富士山の美しさの秘密を客観的に解き明かすだけでなく、そのことを通じて、原発事故という歴然たる事実の前に、私たちを連れ戻す。

この夏、福島県二本松市の有機農業家、大内信一さんから話をうかがう機会があった。1970年代以降、有機農業者と消費者とが積み上げてきたはずの「顔の見える関係」が、3.11の原発事故を境に「目をそらす関係」になったという。そうした中、有機農業者らが協同で、綿密な調査を重ねている。セシウムがどの作物に吸収されやすいのか、どのような土壌に固定化されやすいのか、作物のどの部位に影響が出るのか…。例えば、実の部分に吸収された放射性物質が、搾った油には移行しにくいこと、しかしその搾りかすからはセシウムが検出されるため、従来のように堆肥にはできず、有機農業の「循環性」は断ち切られていること…そうした、土、作物、その加工等、各段階での放射性物質の移行の複雑な仕組みを一つひとつ、地道に解き明かしていく様子をうかがって、圧倒される思いを抱いた。原発事故との、長い向き合いは、まだ始まったばかりであることを、あらためて確認した。(田中夏子・副編集長)

この夏の、ジャーナリスト山本美香さんの犠牲は、ほんとうに痛ましいことでした。彼女は、平和と人権を核心にして民衆という視点から事実を伝えようとされていたわけで、私たちの地域交流研究としても彼女のメッセージを受け止めていきたいと思います。掲載の写真は、都留市における「偲ぶ会」(10月4日：「うぐいすホール」にて)の様です。

さて、地域社会に学校があり、またたくさんの人に見守られながら新しい命が生まれ育っていくということは、本来「当たり前」のことでしょう。けれども、少子化や過疎化がすすみ、日本各地でこの「当たり前」のことが危うくなっています。特集では、都留の地で子どもたちが育ちつつあるということ、またこの地域に学校があり教育実践が営まれているということ、そのことへの関わりを通して、意識して見つめてみようと考えました。〈地域と学校〉〈地域と子ども〉というテーマの大事さは、「3・11」の諸経験が改めて私たちに教えていることでもあります。

地域交流研究センター事務担当として本田祐士さんが新たに着任しました。このページの写真撮影を含め、活躍してくれています。

次号は、「観察し、聞き取り、表現する—私たち自身の心を働かせること—」を特集する予定です。  
 (畑潤・編集長)

